

## 2. 3. 1 ① 原子力防災探究ゼミ

原子力災害によって失われた地域コミュニティの再構築など、双葉郡における様々な問題を調査研究し、生徒それぞれが課題を設定しその解決を目指す。震災から10年が経過し、バナナやコーヒーの栽培など新しい事業を行うところがある一方で、期間が進まない地区もあり、地域が抱える問題や状況は大きく変わってきている。

5期生の原子力防災班は、2年次で中心的に行った調査研究を通して知った地域の状況と、未来を作り出す探究を考え、ありがたい未来を設定し、バックキャストで問題と課題を設定し解決アクションをはかった。

(QRを読み取ると動画をご覧になることができますが、スマホアプリ“FlipGrid”で読み取ることで、この紙面上にARで動画がご覧いただけます。)

### (1) はじめに

昨年度の調査研究を中心とする現状把握については、以下の点に着目して改善した。これまでの反省点として「印象だけで物事をとらえ、事実を確認しないで、探究を進めていくこと」、例を挙げると、この地域の問題は何かと尋ねた際、「コミュニティの崩壊」、「風評被害」など震災当時から言われていることを、印象で語る傾向があった。改善点として、新聞やテレビからの印象操作に乗らず、それらメディアから1次情報を探るためのキーワードを見つけ出し、事実を明らかにするように指導した。

解決のアクションとして、クリエイティビティに着目し、自分の探究テーマに対して、全く違う分野のことを掛け合わせて、より効率的な解決案を考えることを行った。これについては、これまでの探究で大きく飛躍した先輩方が、無意識にこの発想で行っていたと思われる。たとえば、2期生のT・S君は「避難経路」に「祭り」を掛け合わせた探究、3期生のM・Wさんは、「地域理解」と「交換留学」を掛け合わせ地域交換留学を行った。

高校生が行う探究におけるプロジェクトは、フォアキャストで考えたものや、常識的な範囲で考えたものは、ほとんどすでに行われているものであり、経験のある地域の人たちにとって、高校生が使い勝手の良い人材になり、地域との協働を行う際にも、イニシアチブをとるところか、対等な関係でアクションを起こすことができなくなることがある。もちろんそれも学びになるので悪いことではないが、地域の人たちとwin-winの関係を構築するためには高校生の自由で闊達なわくわくするような発想を進めていけることが理想であると考えている。

以上のことを踏まえて、生徒に対する適切な関わり方を意識しゼミを進めてきた。

### (2) 実施内容

#### 【調査のためのオリエンテーション】

#### 【解決アクション】

2年次からの探究活動を2021年9月に行われた「未来創造探究発表会」で提出する最終発表をご覧いただければ

幸いです。

### ○生徒の探究と実践の発表

#### ① マイクラでつくる双葉郡

マイクラフトというゲームを使い、双葉郡を作成している。ゲームを使うことで多くの人に双葉郡に興味を持ってもらい、将来的にはVRで実際に体験できる様にしたい。



#### ② 鉄卵という地域の可能性

地域の砂鉄を使って南部鉄器の技術で鉄卵をつくる探究と、物質が人体に与える影響を探究している2人が協働して探究している。鉄の専門家からアドバイスをいただきオリジナルの炉を作成し、鉄を取り出す実験をしました。



#### ③ Future Quest～地域のゴミを花に変える

双葉郡にあるゴミをすべて花に変えるプロジェクト。ブンケンさんとゴミを拾ったり、国土交通省から借りた花壇を花で埋めたりしました。そして、ゴミを花に変えるスタートとして大きな看板を双葉町6号線に作りました。双葉と言えばきれいな花咲く場所！というイメージを作っていきたい！



#### ④ 浪江町を元気に笑顔に～開けてびっくり！浪江の宝箱

浪江町商工会青年部と膝をつき合わせて町おこしを考えました。商品開発だけでなく、話題づくりのためのイベントを通して、協働しながらまちおこしをしてきました！



#### ⑤ エネルギーからエコロジーへシビックプライドを形成する環境事業の提案

海洋プラスチックの問題の研究を通して、環境ビジネスの世界的な流れを知りました。住民と行政、そして企業が一体となって双葉郡を発展させていくた

めシビックプライドに着目しました。

### ⑥ 村おこし in 葛尾村

葛尾村の村おこしを探究している。スポーツイベント等様々なイベントを通して活気ある町作りと魅力作りを地域の方と協働しました。葛尾でできたお米を炊いておいしいご飯の魅力を伝えるイベントを行いました。



### ⑦ 絵本で記憶の受け渡し

震災の経験や体験を震災の記憶を持たない世代へ伝えていくことを探究している。記録としての震災ではなく記憶としての震災を伝えること、そしてそれを、絵本を通して伝えていくために日々探究している。



### ⑧ VR in Futaba (with メディア班)

多くの先輩方がチャレンジしてきた双葉郡ツアーを VR で海外の方でも双葉郡を楽しめるコンテンツを作っています。多くの方が、双葉郡の魅力を VR で感じてもらえるように進めています。



### ⑨ 双葉郡内の未来時代を描く！！

2年次に訪れた双葉駅周辺！震災で壊れてしまっている今の双葉町と未来の明るい双葉町の絵を描いて残す探究をしました。

### ⑩ ふたば花革命

アロマティックバーを双葉郡に咲いている花をつかって作る商品開発を行った。Future Quest の渡辺さんとともに、双葉郡のゴミを花に変える取り組みとコラボしながら行った。



## (3) 成果と反省 (探究プロセス)

### ○課題設定について⇒現状分析

ふたば未来の「探究プロセス」では、stage1 で問題発見/課題設定を行うことになっているが、インプットが

《成果》

文部科学省主催 Glocal High School Meeting 2022 日本語部門 金賞 鉄卵という地域の可能性

文部科学省主催 Glocal High School Meeting 2022 英語部門 金賞 マイクラで作る双葉郡

福島県教育委員会主催 令和3年度 ふくしま高校生 社会貢献コンテスト

福島大学アドミッションセンター賞 浪江町をを元気に笑顔に

福島県教育委員会主催 令和3年度 ふくしま高校生 社会貢献コンテスト 入選 Future Quest

福島県総合学科課題研究発表会 口頭部門 入賞 Future Quest

ふたば未来学園 未来創造探究発表会 最優秀賞 鉄卵という地域の可能性

されていない状態でのそれらの設定は非常に難しい。理想の状態をイメージしようとしても、具体的に頭に浮かんでこない生徒が非常に多かった。そのため、原子力防災班では、2年次のはじめに、全員で、複数のフィールドワークや映像資料等を遣い現状把握を行った。その際、データや資料を読み取ることが得意な生徒には、RESAS やその他の1次資料をもとに地域をより客観的に見つけることを、そうでない生徒に対しては、様々な場所や地域の方（一般社団法人 AFS 吉川彰浩様など）のところに訪問しお話を伺うなどし、班の中でそれらの情報を共有することをスタートラインとした。現状を知るだけでなく、歴史的な観点から過去もしっかりと調べることが探究を行う上で非常に重要だと分かった。

### ○課題の再設定⇒解決仮説

現状を知ること、顕在的な問題を把握し、その後、生徒それぞれが理想の未来を設定し、問題と課題の再設定を行った。解決アクションについては、クリエイティブ思考として、自分の好きなものという全く異なることを掛け合わせ、解決方法を探った。

### ○解決アクション⇒考察

顕在的な問題(第3者が描いた理想に対するギャップ)に対する解決アクションは、すでに解決策が多くとられていることがほとんどであり、そこをスタート地点とすることは問題解決の学習としては良いが、社会との協働としては十分ではない。課題の再設定において作った解決アクションは、課題解決の学習だけでなく地域に対しての高校生としての新たな発想としてヒントを与え、WIN-WIN の協働を成り立たせることが可能だと分かった。

## (4) まとめ

事実を客観的にとらえ、既存の問題に対して分析を行い問題と課題を再設定するという手順を踏むことによって、探究の土台とし、クリエイティブ思考として、生徒自身の興味あることをかけ算で組み合わせることで、生徒自身のオリジナルの探究を展開することが出来、持続的に探究活動に集中するということが見えた。総合的な探究の時間のあるべき姿として提案ができるものになったと感じる。

## 2. 3. 1 ② メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下メディアゼミ）は地域や社会の問題を意識し、その解決のためメディアを用いた情報発信や、未来への伝達のアクションを目的とし、33名（女子25名、男子8名）が在籍している。注意点として、実践が進むほどメディア製作そのものが目的化してしまいがちなので、出発点である課題や伝えたいことを意識させ続けた。

### (1) はじめに

五期生は震災当時小学校一年生だった世代だ。彼らには「自分たちが震災時の記憶を持っている一番下の年代ではないか」という意識が強くあるようだ。彼らの中には、下の世代に対して「震災の記憶を伝えていきたい」という気持ちだが、使命にも似た感情を帯びて秘められている。

### (2) 二年次までの取り組み

第一原発最寄り校の本校生たちは、それゆえに社会の課題に向き合わざるを得ない。一年次は地域の現状と、解の見えない課題を肌で感じた。二年次では探究の授業で彼らは理想と現実のギャップから探究テーマを設定し、仮説を吟味するための「調査のアクション」をしてきた。これを踏まえ、三年次ではよりよい社会を自分たちの手で創ることを目標に探究活動を行った。

### (3) 各生徒の取り組み

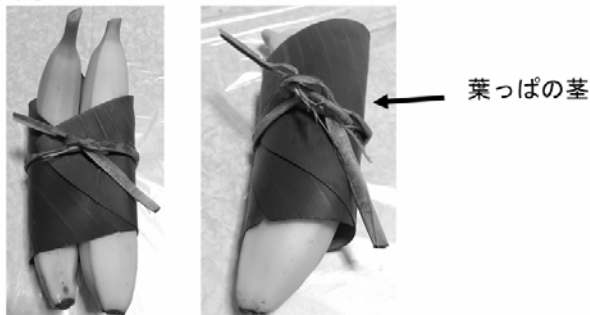
#### 「ふたばの花革命」

双葉郡に咲いている花をドライフラワーにし、アロマンティックバー作りを図った。

#### 「もったいないバナナ」

脱プラスチックに向けたレジ袋の有料化が浸透していることから、バナナの葉を再利用することでビニール袋のコストも削減できるのではと考え、地域の方とともに試行錯誤した。

#### ① 四角くカットして包む



(試行錯誤の一例)

#### 「VR in Futaba」

双葉郡のマイナスイメージを払拭するための情報発信を

行ってきた。双葉郡ならではの魅力をVRカメラで撮影し、その動画をYouTubeに投稿した。

#### 「ふたばメディア」

今までの探究の活動を集約し、記録、発信し学びを還元するシステムが必要と考え、サイト「ふたばメディア」を製作した (<http://futabamedia.com/>)。これにより、先輩が先輩の活動を参考にでき、地域との協働を可視化することができた。



(HP トップページ)

#### 「動物の殺処分を減らしたい」

震災後放浪していた動物たちが殺処分となり福島県の殺処分数がワースト1位という記事を読みアクションを行った。ペットショップのことも考察した。



(富岡町のNPO法人栖さんへ取材しました)

#### 「正しい情報を私の言葉で」

YouTubeで私自身の学校生活や探究活動、研修活動の様子などを撮影・配信することで福島の現状や課題を知ってもらい、無知による偏見をなくし福島の復興活動に携わっていく人を増やすことを目的として活動してきた。



### 「富岡元気づけっぺ」

富岡観光協会の方たちと協力し、自分たちが興味のある美容と関連づけ、町の特産品を使用した商品開発を考えることにした。そこで、富岡町のお酒「天の木」と富岡町のフルーツ「パッションフルーツ」に目を向けた。



(インスタグラムで広告した)

### 「全ての子どもに豊かな生活を」

現在、社会問題化している子どもの貧困に注目し、自分たちと同じ若い世代に伝えたいと考え、いわき法律事務所弁護士の菅波香織さんと相談、いわき市湯本町にある「放デイ AND 舎」のインスタライブにも参加をさせていただき、探究についての情報発信を積極的に行った。

### 「LGBTQと私」

LGBTQをただの個性として捉えてほしいため、探究テーマとした。アパレルブランド KINGLYMASK、EINS HIMMEL+から衣装提供を受けた。

### 「韓国と日本が仲良くなるには」

K-POP や韓国ドラマが好きで韓国について興味がありこのテーマにした。歴史を調べ、立命館アジア太平洋大学卒業生が立ち上げた任意団体 J IWA・J IWAが主催している J IWA・J IWA オンライン韓国語講座などに参加した。

### 「動物の殺処分を減らす&ペットとの避難について」

災害時にその場に残されて、家族と離れてしまう動物がいる。保護されても元の飼い主・引き取り手が見つからずに殺処分に回されてしまうペットがいることを知り、広報活動を行った。

### 「大熊町民とのつながりを作る」

実際に大熊町に人を呼び込むために、どのようなイベントを企画開催するべきかを考え、それを実行しどう回復していくか探究した。

### 「「他人事」を「知り合い事」へ FROM “SOMEBODY ELSEs THING” TO “KNOWN THING”」

自分のふるさとでは無い関係ない場所での問題に対して無関心な人の意識を変え、関心を持ってもらいその輪を広げていくためのイベントを行った。

### 「未来を担う人材を」

震災の記憶と教訓を伝える活動に貢献するべきではないかという思いから、震災から得られた教訓や人の想いを後世に伝え、新たな知識と繋げて発展させていくことができるような機会を作るプロジェクトを行った。



(関西の高校生とオンラインで交流した)

### 「富岡の酒粕を使った新メニュー」

富岡町で作った日本酒から生まれる酒粕を用いて、新しいメニューを考えました。

### 「ループリック、うちの言葉で訳してみた！」

ループリックはふたば未来学園の生徒のデータが一目でわかり、これからの学校に必要な物だと思う。しかし分かりづらいので、私たちはループリックの言葉を分かりやすく「翻訳」した。

### 「LOCAL WEDDING」

私たちの探究では、将来の夢であるウェディングプランナーに関する知識を身に着けることと、地元の活性化を関連付けたものだ。双葉郡の活性化、結婚式の魅力を知ってもらうことを目標に探究活動を始めた。

### 「震災について語ろう」

私たちは、震災の記憶を繋ぐこと、防災準備や対策の大切さを子供たちに伝えることを目的とし紙芝居イベントを開いた。



### 2. 3. 1 ③ 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たな再生可能エネルギー推進ビジョンとして震災以降の社会情勢も反映させた「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

本校の再生可能エネルギー探究ゼミでは、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」をもとに福島県や双葉郡の現状を把握し、課題を見いだし、解決の糸口を探究することが一般的な進め方ではあるが、私達は探究の動機付けとして学校周辺の産業や自然環境に着目し、フィールドワークや基礎実験などの演習を全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。それと同時に、各グループごとの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。

#### (1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒13名が、お互いが協力しながら、探究活動を進めてきた。全体の活動としては、広野町火力発電所訪問、浅見川の清掃活動・水質調査、ふるさと創造学の講演会等、様々な取り組みを行ってきた。また、各グループごとの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。それらのグループは大きく分けて、トリチウム水処理班、海洋温度差発電班、リモネン発電班、川探究班に分かれている。

#### (2) 実施内容

##### ① トリチウム水処理班

東京電力第一原子力発電所事故によって発生しているトリチウム水処理の問題に注目した。この問題は、地域の関連性が非常に高いにも関わらず、地域の関心が低いという現状がある。このことを踏まえて、自分達でどのようにしたら、より分かりやすくトリチウム水処理の問題を伝えていけるのかを考察した。

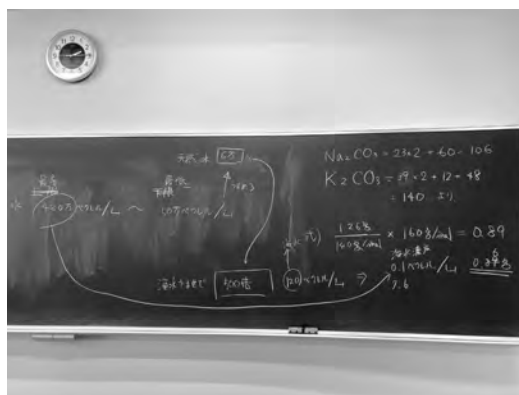
まずは本校の生徒がどれだけ問題意識を持っているかを調査するため、校内アンケートを実施した。アンケート内容は主に「トリチウム水を知っているか?」、「トリチウム水の海洋放出に賛成か、反対か?」の2つである。しかし、準備不足により、高校1年次からしか回答を得ることができなかった。回答数が少ないため、データの信頼性は低いだが、その中でも、6割の生徒がトリチウム水について知っていることや8割以上の生徒がトリチウム水の海洋放出に反対していることが分かった。こちらの予想よりも興味関心が高いことが分かった。

次に、トリチウム水の希釈の様子を分かりやすく伝える方法はないかと考え、牛乳をモデルとした希釈の実験を行った。牛乳をトリチウムに見立て、海洋放出が可能なレベルや自然界に存在するレベルなど、様々な状態を想定して、希釈の実験を行った。実際に希釈の計算を行うことにより、どれくらい薄めればよいのかが分かった。また、牛乳を使うことで、視覚的に濃さを表現することができた。

さらにこれらの活動を「福島イノベーションコースト構想の実現に貢献する人材育成」の成果報告会にオンラインで参加し、代表発表を行った。他の高校生とも交流を行い、積極的に意見交換を行った。

高校3年次では、川探究班と協力して、水質調査を行ったり、廃炉資料館や福島第一原子力発電所を訪問し、双葉郡が直面している課題について正面から向き合った。

探究活動を進めていく中で、最大のテーマであるトリチウム水の海洋放出が決定してしまったため、最終的にはトリチウム水の効果的な活用方法を考察することに舵をきった。



【希釈の計算】



【牛乳を使ったトリチウム水の希釈実験】

## ② 海洋温度差発電班

東日本大震災前は自然環境にも恵まれ、原子力発電によって、経済的にも支えられていた大熊町。しかし、東京電力第一原子力発電所事故によって、全域避難となってしまった。その結果、町外への人口流出が続いている。そんな大熊町を、再生可能エネルギーを使って魅力のある町にし、地域の復興につなげる活動をしたと考えた。その再生可能エネルギーの手段として、海洋温度差発電に着目した。海洋温度差発電とは、海の表層と深海の温度差を利用した発電方法で、発電量が安定しており、太陽の熱エネルギーを有効に使うことができる。この発電方法を大熊町の海洋で実現できないかと考えた。

まず海洋温度差発電を実現するための基礎実験として、対流の実験を行った。水槽に入った水をヒーターで温めることで、実際に対流が起きているかどうかを調べた。水槽の表層と深層の温度を実際に測定し、グラフにまとめることができた。やはり水槽全体を温めるためには時間がかかってしまい、さらに、温度差はあまりひらかないことが分かった。

次の基礎実験として、ジエチルエーテルをチューブ内で液化させる実験を行った。ジエチルエーテルは海洋温度差発電において、冷媒となる物質でありその性質を確認することができた。

高校3年次では、発電装置の構造を調べるため、本格的な理科の実験器具であるソックスレー抽出器を用いたジエチルエーテルの実験を行った。実験は一人でできるものではなく、あらためて他者と協働することの大切さを痛感した。理論→実証→改善、このサイクルを通して、少しずつ実験の精度をあげていった。

最終的にはオリジナルの海洋温度差発電の発電機的设计図を作成することができた。発電機の試作まではできなかったため、卒業後も引き続き、発電についての研究を進めていきたい。

## ③ リモネン発電班

広野町の特産品としてみかんが有名であるが、あまりみかん単体として販売されていない。その理由を調べたところ、主に加工用として生産されていることが分かった。そこで広野町のみかんを多くの人々に知ってもらい、さらに地域の活性化につなげるため、リモネン発電に注目した。リモネンとは、みかんの皮に含まれている成分で家庭用食器洗剤にも含まれている成分である。

まずは広野町のみかん園のみなさんに協力を依頼し、実際にみかん狩りを行った。みんなで協力して収穫作業を行い、数箱分のみかんを確保することができた。次に大量のみかんの皮を集め、それをすりつぶしてフラスコに入れて、水蒸気蒸留でリモネンを抽出する実験を行った。はじめは油のような成分を抽出することができたが、時間の経過とともに、その成分が蒸発してしまった。2回目の実験として

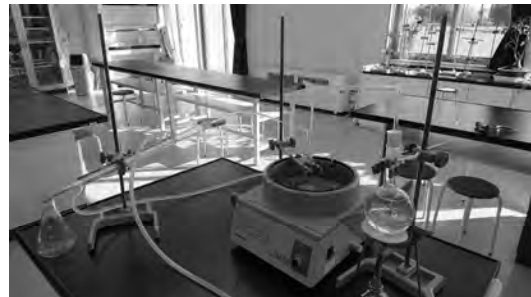
ウォーターバスを使用し、みかんの皮の温度を上げてから水蒸気蒸留を行った。その結果、リモネンと思われる成分を抽出することができた。

高校3年次では、地域のゆず狩りの活動に参加し、地元の幼稚園を訪問し、そこで自分達の実験を披露することができた。実際に実験を体験してもらうことで、成分抽出のプロセスを知ってもらい、興味関心を持ってもらうことを目的とした。抽出した成分は芳香剤として参加者にプレゼントした。

また UV 装置を使った、抽出したリモネンとサンプルの成分比較も行った。その結果、確かにリモネンの成分が存在するという検証結果が得られた。しかし、リモネンの成分を実用化するためには、みかんが最低1トン必要であり、発電への利用や商品化はとても難しいことが判明した。



【みかん狩り】



【水蒸気蒸留の実験】

## ④ 川探究班

再生可能エネルギーの原点として、まずは地域の自然環境を知ることが基本として、活動を行ってきた。その中でも広野町の主要な川として、浅見川に注目し、水質調査や生態調査を進めてきた。水質調査では、実際に浅見川の上流・下流の水を採取し、CODを利用した実験で、その性質を確かめることができた。また生態調査では、浅見川に生息している生物を捕獲し、飼育と養殖を試みた。その中でも広野町にしか生息していないキタノスジエビを発見することができた。これ以外の活動としては広野町役場でのインタビュー、五社山のフィールドワーク、浅見川の清掃活動などを行った。

高校3年次では、引き続き、浅見川の清掃活動に参加し、地域の人々の温かさや本校に対する期待の高さを、身を持って感じる事ができた。復興の拠点としての本校の役割を再認識できた。

またキタノスジエビの飼育を行ったが、やはり自然

環境の生物をより自然環境に近い状態で飼育することはとても難しく、抜け殻を採取する前に、すべて死滅してしまった。

本来であれば、キタノスジエビの抜け殻を採取し、その抜け殻が CO<sub>2</sub> を吸収することを実証しようと計画していたが、残念ながら確かめることはできなかった。



[水質調査]



[浅見川清掃活動]

#### (4) 課題と展望

これで約2年間の探究活動は終わりを迎えるが、それぞれのグループで様々な課題と新たなテーマを見つけることができた。この再生可能エネルギー探究ゼミの最大の強みは「チームワーク」であり、どんな困難に直面した時も、お互いが協力し、支え合いながら、1歩ずつ着実に探究活動を進めてきた。

「発電」だけに限らず、地域の「自然環境」にも着目し、幅広い視野で探究活動に取り組んできた。卒業後も、それぞれの分野でさらに調査研究を進めていってほしい。そして、「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」の実現を切に願っている。



## 2. 3. 1 ④ アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミは、双葉郡の農業生産の現状を鑑み、今後の農業とビジネスを探究するゼミである。令和3年度はアカデミック系列、スペシャリスト系列農業、商業、福祉の生徒から成り、計12名（男子5名、女子7名）で実施している。

本ゼミでは、6つのプロジェクトが進行しており、県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み、地域資源を活用した商品開発、持続可能な農業に向けた開発、地産地消の推進が主になっている。

### (1) はじめに

本ゼミでは、これから始まる探究活動が単なる調べ学習や自己満足的な活動にならないよう、キックオフの際に、「あなたはなぜ〈プロジェクト〉を行うのか」、「そのプロジェクトは、〈誰のため〉〈なんのため〉に行うのか」といった問いを生徒に投げかけ、探究活動の意義を考えさせ進め方を共有した。

### (2) 実施内容

#### ① 今年度の流れ

本ゼミでは、6つのプロジェクトが進行しており、原発のイメージ払拭（①「大熊新特産品「いちご」～Make a Smile with sweets～」）、県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み（②みんなバナナすきだよねえ）、③資源の再利用の推進（⑤「古着にもう一度光を」）④「ニーハオはばたけ広野バナナ」地域資源を活用した商品開発（⑤「凍み天復活」）、⑥メディア&福祉&アグリ協働「お肌つるつるお米パック」が主になっている。

・新型コロナウイルス感染症予防の観点から、アクションに制限があったが、感染症対策をしっかりとって、生徒それぞれが考えた未来創造探究発表会（9月25日）に向けた取り組みとなった。

・論文執筆

2年間の探究活動を論文にまとめた。

#### ② 活動内容

・「大熊新特産品「いちご」～Make a Smile with sweets～」



福島民報 2021年7月23日

#### ・みんなバナナすきだよねえ

震災後、双葉郡の農林水産業を取り巻く課題の一つに「風評被害」がある。本探究では、この課題に目を向け、広野町の特産物として力を入れている「広野産のバナナ綺麗」を用い、風評被害の払拭と地域の方と関わりが薄れている現状から、地域の方とのコミュニケーションツールとして「バナナカステラ」を利用できないかと考えた。広野町の農産物を活用した加工品の商品開発を行い、町を訪れた人に配布することで、広野町の魅力発信を目的としていた。

広野町振興公社の中津氏の協力のもと、広野町特産のバナナを活用したカステラを製造し数度の試作をして完成させたバナナカステラに対して広野町をPRする貴重な取り組みと高く評価していただいた。



広野町振興公社 中津弘文様 2021年7月14日



試作の様子 (2021年2月)

### ・古着にもう一度光を

SDGs 12 つくる責任つかう責任に着目し、捨てられてしまう古着の再利用をテーマに掲げた。作業着として新たに古着のリノベーションを目指す。また、オーガニックコットンの需要と供給の調査調や、環境に配慮した持続可能な活動をめざした探究内容である。



N.P.O. ザ・ピープル理事長 吉田 恵美子 様



2021年  
7月11日

### ・ニーハオーはばたけ広野バナナー

震災後、双葉郡の農林水産業を取り巻く課題の一つに「風評被害」がある。本探究では、この課題に目を向け、広野町の特産物として力を入れている「広野産のバナナ綺麗」を用い、風評被害の払拭と地域の方と関りが薄れている現状から、地

域の方とのコミュニケーションツールとして「バナナギョウザ」「バナナ春巻き」を利用できないかと考えた。

商品コンセプトとして必要な、商品のターゲット（誰が）、ベネフィット（どのような価値）、シーン（場面）を考え、商品の試作を繰り返し商品化に向けたアドバイスを受け商品開発を行った。アクションを通して地域の方々との交流がしつかりと生まれた。



広野町振興公社ひろぼーの休憩所

2021年6月30日

- ・皮がしっとり系よりもカリカリ系の方が良いと思う。(20代男性)
- ・中身の餡がもう少し詰まっていたほうが良い。(60代男性)
- ・餃子の皮ではなく、パイ生地が良いかも。(40代男性)
- ・チョコではなく、あんこバージョンも食べてみたい。(40代女性)
- ・油っこさが口に残った。皮ももう少し薄く、パリッとしていたらもっと良かった。(30代男性)
- ・軽い口当たりで美味しい。どうやって日持ちをさせるのか考慮する必要あり。(60代男性)
- ・アイディアは面白いと思う。冷めたせいか、バナナとチョコの味が薄く感じました。(30代男性)
- ・バナナ風味が弱いと感じた。「バナナ餃子」と言われなければわからなかったかも・・・(40代男性)
- ・チョコ味が濃いため、もう少しチョコを少なくしてもよいかも(20代男性)
- ・販売するにあたり、売値は幾らに設定するのか気になる。(20代男性)

### ・凍み天復活

震災前南相馬市で販売されていた上げ菓子「凍み天」。震災後工場が被災し一時生産中止となる。その後支援を受け、営業を再開するが、ほとんど知られていない。友人とのたわいのない会話から「凍み天」のワードに関心を持ち、「凍み天復活」を探究テーマに掲げ活動を試みた。

### (3) 成果

新型コロナウイルスの影響で商品開発をした商品を地域イベントや自主企画イベントで地域の方々に広く伝えることができなかった。しかし、生徒は社会状況に順応し探究活動を継続することができた。

### (4) 課題と展望

県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み、地域資源を活用した商品開発、持続可能な農業に向かう開発、地産地消の推進テーマを掲げそれぞれの探究活動を行ってきたが、多くの大人との関りから地域課題について再確認し、実践を通して何を学ぶのかを整理していくことが必要である。



## 2. 3. 1 ⑤ スポーツと健康探究ゼミ

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から11年を迎えた。この11年の間には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開など、復興が進み明るい話題が増えてきた。一方で復興は進んでも、人口の減少は歯止めがかからない。令和4年度には新地高校と相馬東高校が合併し、相馬総合高校となり、相双地区から高校が1つ減ることになった。さらに、今年度も新型コロナウイルス感染症が世界で猛威を振るった。

そんな中、今年度は延期になっていた東京オリンピックが十分な感染対策を施して開催されたことは日本全体に大きな希望と勇気を与えた。インターハイや夏の甲子園などのスポーツの祭典が実施され、少しずつではあるが日々トレーニングに励むアスリートたちの活躍の場が復活してきた。

「する」「観る」「支える」「知る」。このような状況にある今だからこそ、世界や社会、地域、さらには自らの課題に目を向けて、どのような課題が蓄積されているのかを知り、スポーツを生かして世界や社会、地域、自身の課題解決を目指した。

### (1) 2年次の活動

総合型地域クラブによる地域活性化、健康の増進、子どものスポーツ環境の支援、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現やアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行った。

### (2) 実施内容

本ゼミはトップアスリート系列の生徒で構成されている。全国各地から本校に集まってきている利点を生かし、「それぞれの3.11」を共有する時間を設定した。そして、その流れを生かしながら、それぞれの出身地における様々な課題を調査した。遠方でも自分の地域と同じような課題があるということを知り、互いの共通点を見つける時間とした。

次に「世界」へ目を向ける時間を設定した。スポーツに限らず、様々な世界の課題を調査した。

これまでの学習を積み上げ、世界や日本、地域、自身の課題調査からどの課題を解決するか決定し、自分がスポーツにおけるどのような立場（選手、指導者、経営者、スタジアム、アリーナ、スポーツショップなど）で関わり、最終的にどのように「win×win」の関係性を作り出すかを考えた。各々で思考を巡らせ後、アイデアが近い生徒同士でグルーピングを行った。過去の卒業生からは生まれてこなかったアイデアも出ており、思考に柔軟性があった。

### (3) 3年次の活動

2年次からの活動を踏襲し、アクションを継続した。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響は大きく、現地に赴いてのアクションに制限がかかり、満足な活動ができなかった。そんな中でも自分たちができる活動を模索し、実践を行った。

### “TikTok～いきいきプロジェクト～”

広野町の高齢者の健康増進にフォーカスし、高齢者の運動機会の拡大のためのアクションを立案した。SNSの「TikTok」を取り入れることで、若者



や世界を視野に入れた情報発信を狙った。高齢者向けの簡単なダンスを作り、地域の集会所を訪問して実際に指導しながらダンスを一緒に踊るアクションを実施した。座ってもできるように、また、ダンスが苦手な方でも取り組みやすいように配慮したダンスを考え、アクションを重ねた。



### “スポーツの力で世界と繋がる”

SNSを取り入れながら「世界と世界」を繋げる新しいパイプになるため、東日本国際大学の留学生との交流を通して、スポーツは言語や文化を越えて楽しむことができるツールであることを発信しようと考えた。コロナ禍で交流活動が制限されたため、「You tube」を利用して自分たちがサッカーを楽しんでいる動画を世界へ発信するプロジェクトを実施した。いかに海外の方が楽しんで観てもらえるか、という視聴者の視点で3本の動画を作成し、それぞれの動画に英語の字幕を添えたこともあり、海外

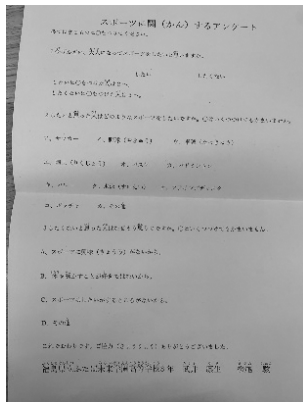


の方から高評価やコメントをいただくことができた。



## “障がい者スポーツの振興”

福島県のスポーツの課題を調べていくうちに、障がい者のスポーツの機会が少ないことを知り、知的障がい者のスポーツの振興のためのアクションを立案した。富岡支援学校でフライングディスク、ボッチャ、いわき市のサンアビリティーズで車いすバスケットボールの体験をした。知的障がい者にスポーツを指導するうえで配慮しなければならないことを学び、バドミントンを富岡支援学校の生徒に伝えるアクションを立案した。また、県内の特別支援学校の高等部の生徒にスポーツに関するアンケートを実施し、する側の意識の問題より、支える側の少なさ、指導の難しさ、施設の少なさに課題があることを導きだした。



## “貧血に悩む女性アスリートを少しでも減らそう”

女性の貧血問題に注目し、女性アスリート自身だけでなく、その周囲に関わる人々へも発信することで組織的な課題解決へ導いていくアクションを立案した。貧血のメカニズムから栄養や睡眠の質の高さが重要なことを知り、女性アスリートを対象に貧血についてどれくらい知識があるのかアンケートを作成した。また、JFA メディカルセンターの檜山トレーナー、元バドミントン女子日本代表の潮田玲子さんとのオンラインミーティングを開き、学んだことを生かし、校内で女子中高生向けの交流会を企画しようとした。交流会は実現できなかったが、貧血についてのパンフレットを作成した。



### (4) 成果と課題

それぞれのグループで、2年次から考えを深めたテーマを実践すべく、3年次を迎えたが、新型コロナウイルス感染症の拡大は落ち着かず、現地に赴いたり、交流したりするアクションはほとんどできなかった

のが残念である。感染状況が落ち着き、プロジェクトの実践まであと一歩のところまで再拡大し、満足な探究活動が行えなかったことで、モチベーションを保つのが非常に困難だったように思う。それでも限られた時間の中で、対話を重ね、現在の状況でできることを模索し、プロジェクトを実践できたことは素晴らしいかった。幸いだったのは、この年代は休校期間があったことで、オンラインでの活動に慣れており、オンラインでの交流を深められたグループがあったのがよかった。また、SNSの取り扱いにも慣れており、映像編集も様々な演出を加えて見ごたえのある動画を作成できた。今後このような形での交流やプロジェクトが増えていくのではないだろうか。

一方で、テーマの設定については課題が残る。地域の課題に目を向けてはいるが、テーマが大きすぎてプロジェクトの実施が困難だったり、テーマとプロジェクトが重ならなかったりするグループもあった。「スポーツと健康」ゼミであることから、地域の課題とスポーツを結びつけて探究活動を深めていくのだが、地域の課題について、無理やりスポーツを絡めている感じが否めないグループもあった。

また、全員がトップアスリート系列の生徒であるので合宿や試合等が重なり、探究活動をしたくてもできない日が続いたりすることもあった。それでも電話やメールを駆使してアポイントを取ったり、依頼文を作成したりと自分の役割に責任を持って臨む姿はいかにもトップアスリートであった。しかし、生涯プレーヤーでいることは不可能で、いずれプレーから一線を引くときが来る。その時自分は何ができるのか。その時この探究活動で学んだことが生かされると考えている。

テーマ設定やプロジェクトの実施など、なかなか思うように進まない2年間ではあったが、この2年間の取り組みは必ず役に立つことと信じている。そのためにも、トップアスリート系列の探究活動のテーマの在り方を見直す時期に来ているのではないだろうか。地域の課題をスポーツを通して解決することも必要であるが、自分の専門種目の課題解決に向けた、いわゆる大学の卒業論文のようなテーマでも探究を深めることができるのではないかと。トップアスリート系列の生徒だからこそ、自分の専門種目に目を向け、自分やチームの課題解決に向けたアクションを実施することもプレーヤーとして大きな経験になると感じる。「スポーツと健康」ゼミの今後のテーマの在り方について、生徒とも議論を重ねていきたい。

## 2. 3. 1 ⑥ 健康と福祉探究ゼミ

健康と福祉ゼミは、「健康」や「福祉」に興味のある生徒や高校卒業後の進路に福祉系を考えている生徒が選択している。自らの関心のある事柄と「健康」や「福祉」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて探究活動を行っている。

### (1) はじめに

「健康」や「福祉」の分野は幅が広く、生徒の興味・関心も多岐にわたる。本ゼミでは個人での活動が多く、昨年度からの継続でそれぞれ探究活動を進めている。

### (2) 実施内容

#### ① 今年度の流れ

- ・ゼミ内発表（4月14日）

中間発表の練習のためにゼミ内で発表会を行った。ゼミの仲間や先生方からアドバイスをいただき、スライドや発表の仕方を改善することができた。

- ・中間発表（4月21日）

2年次で行った探究活動の内容と反省、今後の見通し等をまとめ、PPスライドを用いて発表を行った。9月の未来創造探究発表会をイメージする機会となった。

- ・活動計画の見直しと実践（4月～12月）

これまでの活動や新型コロナの状況を踏まえて活動の見直しと実践活動をくり返した。

- ・ゼミ内発表会、発表動画撮影（9月15日）

未来創造探究発表会の代表者を選出するためのゼミ内発表会を行った。また、その様子を動画撮影し、各自で振り返りを行った。

- ・未来創造探究 生徒発表会（9月25日）

各ゼミで選出された代表者は、これまでの活動のまとめを発表し、審査員の方々からアドバイスをいただいた。



未来創造探究 生徒発表会の様子

- ・論文執筆（10月～1月）

2年間の探究活動を論文にまとめた。

### ② 活動内容

- ・広野町探検隊 ～仲良し大作戦～

子ども達の肥満率の増加に着目し、日常的に体を動かせる環境づくりについて考え活動をした。2年次で計画していた広野小学校3年生との「広野町探検」を実施し、広野町の歴史と運動することの大切さについて伝えた。



「広野町探検」の様子

- ・子どもロコモ改善プロジェクト

ロコモティブシンドロームの増加に着目し、小さい頃からの運動習慣の確立をめざし活動をした。広野町公民館にご協力いただき、自分の考えた運動を小学生と共にを行い、小学生の運動習慣の増加に取り組んだ。



「放課後児童クラブ」の様子

- ・音楽療法で認知症予防

広野町社会福祉協議会にご協力いただき、認知症カフェで音楽を用いた動画撮影を計画した。新型コロナの影響により実践には至らなかったが、本校生徒の協力を得て動画のサンプルを作成した。

- ・The challenged

障害者に関わる職業につくことを希望しているので、障害者のニーズを知り、どのような活動をすれば交流できるか考え、計画した。新型コロナの影響により実践はできなかったが、調査アクションを通してノーマライゼーションについての理解を深めた。

・高齢者に生きがいを！！

高齢者が生きがいを感じるのほどのような場面かを考えた。新型コロナの対策をとりながら広桜荘に通う高齢者の方々との交換日記を行い、交流を続けた。



高齢者との交換日記の一部

・Make your life in a shelter better

—これからの災害に備えて—

学校で避難所の疑似体験を通して課題を発見し、その解決法を模索した。また、国内外の避難所の比較や避難所におけるベッドの有効性について検討した。

・ハンドケアで高齢者と交流

—私たち高齢者ができること—

ハンドマッサージに関する知識を踏まえて、ハンドケアの練習を繰り返した。また、広桜荘を訪問して高齢者と交流しながらハンドケアの実践を行った。



広桜荘でのハンドケアの様子

アロマストーンづくりの様子

・Aroma and refresh

アロマバスボムを作成し、それを利用したハンドケアで高齢者と交流することを計画した。また、アロマストーンを作成し、香りの癒し効果・リフレッシュ効果について調査した。

・健康な心を持つこと😊

高校生に対し高齢者に関するアンケートを実施し、高齢者に対する印象を知った。また、高校生に高齢者について知ってもらう機会をつくった。

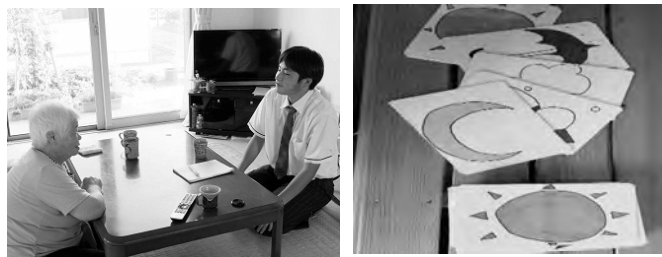
・コミュニケーションでつながるバトン

高齢者の孤独死が増加傾向であることを踏まえ、一人暮らしの高齢者の生活を安全なものにしていくことをテーマとして活動した。檜葉町の住宅地のゴミ拾いを通して高齢者と交流をした。

・認知症 もっと楽しく 毎日を〈ゲーム編〉

認知症患者の生活をより充実したものにしていくこと

を目的として活動をした。高野病院を訪問し、自作のカードゲームを実施していただき、アドバイスを踏まえて改良をくり返した。



高齢者との交流の様子

認知症患者のための手作りカードゲーム

・Enjoy with the elderly

将来、自宅介護をしなければならない人が増えることが想定されるなか、「いざその時」になって困らないように介護についての知識を広めることを目的として活動をした。レクリエーションを考え、広桜荘で実践をくり返した。



広桜荘での手作りボッチャ（レクリエーション）の様子

「福島県」を取り入れた高齢者の食事

・高齢者の健康を支える食生活

自らの進路を踏まえ、「食」を通して高齢者のQOLを向上させることを目的として活動を行った。福島県の食材を活用した献立を考え試作を繰り返した。

(3) 成果

新型コロナの影響により実践が難しい状況の中で代替案を検討し、十分に対策を取りながら探究活動を行っている姿が印象的であった。生徒は実践を繰り返しながら計画的に活動することや地域人材と協働することの大切さ等を学ぶことができた。

(4) 課題と展望

3年次の活動においては、積極的に実践をくり返した生徒が多かった。しかし、「実践してみた」で終わり、地域や世界の現状と関連付けた考察やまとめ発表ができていないことが課題である。実践と並行して「福祉」に関する知識のインプットやデータの活用方法を学ばせる時間をどのように確保するかを検討していく必要がある。



## 2. 3. 2 探究活動発展のための発表会（未来創造探究 生徒研究発表会）

高校2年次から2年間取り組んできた「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。本校における課題解決型学習の成果を披露する機会として、調査アクションのみならず、課題を解決するアクション、生徒自身の総括、社会への提言等を発表した。様々な分野の第一線で活躍されている方（専門知をもつ審査員）や地域の課題に取り組んでいる方（地域知審査員）に審査をお願いした。感染症対策として体育館での全体会は行わず、分科会のみでの発表とした。また外部の参加者には全体会でZoomを活用したライブ配信を行い、保護者や地域の方のみならず、全国に向けて成果を披露した。また、今年度はふたば未来学園中学校が開学して3年目の年となり、初めて中学校3年生の「未来創造学」の成果を発表する機会となった。

### (1) 概要

- ① 目標
- 1) 地域課題解決のための探究と実践に取り組む学習「未来創造探究」の成果をまとめて発表することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（D：表現・発信力、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
  - 2) 発表を聴講することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（A：社会的課題に関する知識・理解、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
  - 3) 保護者、地域の方々、県内外の教育関係者に本校の探究活動の内容を発信し、ステークホルダーとの協働関係をより強固なものにする。
- ② 日時 令和3年9月25日（土）9：00～16：50
- ③ 内容 9：00～10：15 分科会（8教室で高校生4発表、中学生2発表ずつ）  
 10：30～11：10 専門知審査員によるミニ講義  
 11：30～11：50 ★開会行事  
 11：50～12：35 ★全体会Ⅰ（高校生代表発表【前半】）  
 12：35～13：20 休憩  
 13：20～14：05 ★全体会Ⅱ（高校生代表発表【後半】）  
 14：20～14：45 ★全体会Ⅲ（中学生代表発表）  
 15：05～15：50 ★閉会行事（結果発表、表彰、総評）  
 16：20～16：50 教員と審査員の探究交流会

### ④ 審査員 専門知を持つ審査員8名（1～8）、地域知を持つ審査員8名（①～⑧）

	氏名	所属	専門		氏名	分野 or 地域	地域
1	松岡 俊二 様	早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科 教授	地域全般	①	青木 淑子 様	富岡町3.11を語る会、 元富岡高校校長	富岡
2	小山 良太 様	福島大学 食農学類 教授	アグリ	②	吉川 彰浩 様	一般社団法人 AFW 代表	南相馬
3	佐藤 理夫 様	福島大学 共生システム理工 学類 教授	再エネ	③	下枝 浩徳 様	葛力創造舎 代表理事	葛尾
4	菅波 香織 様	未来会議 事務局長 弁護士	地域全般	④	平山 勉 様	双葉郡未来会議 代表	富岡
5	永井 祐二 様	早稲田大学 環境総合研究 センター 准教授	地域全般	⑤	松本 昌弘 様	檜葉町役場	檜葉
6	中田 スウラ様	福島大学 人間発達文化学 類 特任教授	地域全般	⑥	吉田 恵美子様	NPO 法人 ザ・ピープル 理事長	いわき
7	古川 拓也 様	大阪成蹊大学 経営学部 講師	スポーツ	⑦	小松 理虔 様	ヘキレキ舎 代表 ローカル・アクティビスト	いわき
8	猪狩 僚 様	いわき市役所 IGOKU 編集長	福祉	⑧	青木 裕介 様	ちゃのまプロジェクト 共同代表	広野

### ⑤ 外部聴講者（Zoom） 185名（参考：昨年46名）

## (2) 詳細

### ① 事前準備

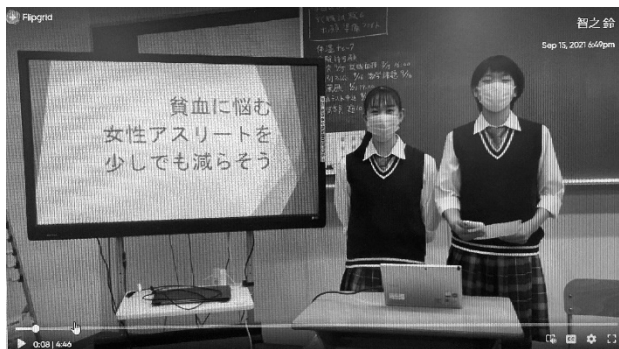
今年度の発表会は県内に「まん延防止措置」がとられている状況下での実施となった。昨年度同様に、コロナ感染症の防止対策を徹底して行うことに留意して実施することとなった。対策としては、全体会における三密回避を徹底するためにアリーナには高校2・3年次と中学校3年生だけとした（中学校1・2年生と高校1年次は別教室でZoom映像を参観する）。また分科会会場の人数についても多くなりすぎないように、8会場で分科会を行った。外部からの来場者は審査員のみとし、それ以外の参加者についてはZoomによるライブ配信を行った。

実践内容を様々な観点から探り、参加者全体で学びを深めるために、分科会会場ごとに専門知を有する審査員1名、および地域知を有する審査員1名に参加していただき、校内審査員（教員）1名を加えて3名で審査をすることとした。地域知を有する審査員は本校の開校の経緯や生徒の探究活動が面的に広がってきたことをふまえ、昨年度は双葉郡の全八町村からお呼びするようにした。今年度はさらにいわき市からも審査員をお呼びした。審査員の方々はこれまで本校の探究活動に参画して下さった方が多く、依頼した審査員の方には快諾をいただいた。

今年度は個人探究に組んでいる生徒が増加し、更に中学校3年生の発表も加わったため、総数の増加が昨年度以上に増加した（今年度74PJ【高校48PJ、中学校16PJ】、昨年度は48PJ）。そのため、今年度は動画による事前審査を行い、高校の発表プロジェクトを58PJから32PJまで絞ることとなった。また、昨年まで発表時間10分であったのを5分に短縮し、内容をより精選して発表するように指導をした。

- ・動画による審査（FlipGridを使用）

発表を5分にまとめ、動画をFlipgrid上にアップさせた。この動画は事前審査のために審査員とも共有をした。



### ② 分科会

- ・昨年同様に、分科会ではゼミの枠を外し、複数のゼ

ミの生徒が参加するようにした。とは言え、分野については共通して括れるように配慮した。

- ・発表数と時間を勘案し、会場数は8会場、各会場で6発表（高校4発表、中学校2発表）を割り当てた。
- ・各分科会に外部審査員2名、内部審査員（本校教員）、司会（本校教員）を設定した。生徒は発表に集中できるように、係の設定は極力少なくなるようにした。



- ・発表するだけでなく、専門知を有する審査員によるミニ講義の時間を設定した。
- ・審査のための審査基準を作成し、その基準に基づいて各分科会会場で審査を行った（未来創造探究賞）。また生徒投票による審査も同時に行った（共感賞）。
- ・分科会の結果、以下のグループが全体会出場となった。（全発表内容については巻末資料を参照）。

○環境事業でシビックプライドを作ろう

○Enjoy with the elderly

○もったいないバナナ

○大熊×いちご×私

○Future Quest

○子どもロコモ改善プロジェクト

○鉄たまごという地域の可能性

○わかものがたり



### ③ ミニ講義（専門知審査員による）

- ・今年度も昨年度同様に専門知審査員によるミニ講義をお願いした。特にこれから探究を進めていく低学年の生徒にとっては、専門家のお話を聞ける貴重な時間となった。

た。昨年度は講義 20 分の内容であったが、今年度は講義の時間を 30 分とし、内容を充実させた。なお、ミニ講義のタイトルは以下のとおりである。

	氏名	ミニ講義 タイトル
1	松岡 俊二 様	「2050 年の福島浜通りの地域社会を考えよう :1F 廃炉や復興はどうなっているのだろうか?」
2	小山 良太 様	震災 10 年以降の福島県農業と新しい産地・ブランド形成の可能性
3	佐藤 理夫 様	2040 年ふくしま再生可能エネルギー 100%の先に
4	菅波 香織 様	対話が未来を作る～8年間の未来会議を通じて感じる無力感と希望～
5	永井 祐二 様	豊島産業廃棄物不法投棄問題と自然再生事業～1F 廃炉における合意形成のヒント～
6	中田 スウラ様	子どもの貧困と地域社会～教育と福祉～
7	古川 拓也 様	スポーツを通して“誰が”地域課題を解決するのか?
8	猪狩 僚 様	「福祉の IGOKU、健康の極意」

#### ④ 全体会

・全体会では先述の高校生代表 8 プロジェクトと中学生代表 4 プロジェクト、中学校バドミントン部の特別発表の全 13 プロジェクトが発表した。表彰は以下の通りとなった。

「未来創造探究 最優秀発表賞」

- ・鉄たまごという地域の可能性

「未来創造探究 優秀発表賞」

- ・大熊×いちご×私
- ・もったいないバナナ

「未来創造探究 発表賞」

- ・環境事業でシビックプライドを作ろう
- ・Enjoy with the elderly
- ・Future Quest
- ・子どもロコモ改善プロジェクト
- ・わかものがたり

「共感賞」大熊×いちご×私

中学校「未来創造学 優秀発表賞」

- ・りーふる編集部
- ・手話を使ってろうあ者理解への第一歩
- ・チームゲーマーズ
- ・五社山嵐 (ごしゃやまおろし) の研究



#### ⑤ 総評 (専門知審査員: 佐藤理夫、菅波香織)

##### 1) 佐藤理夫先生から

- ・探究活動ができる恵まれた環境を振り返って欲しい。他校にはない充実した設備、熱心に探究に向き合っ

ている先生、なにより地域の方々の協力があることを再確認して欲しい。

- ・中学生の皆さんの発表のレベルが高い。これをさらに高校で伸ばして欲しい。高校生も中学生の目標になるように頑張ってください。
- ・テクニカルな話になりますが、5分間のプレゼンはきつかったと思う。人に伝えたいものをもっともっと厳選して欲しい。グループでの発表は考察がちょっと甘いかなと思うところもあった。
- ・探究と学習が乖離していませんか? 理系は特に高校までの理科的知識を踏まえてください。また、理系に限らずデータ解析などを活用してください。「やりたいことをやってみた」となってしまう PJ も見受けられました。学んだものをいかし、どう進めれるか…特に大学進学を考えている方は意識してください。
- ・これは「探究」ではなく「地域貢献体験記」ではないかと思われるものがありました。それはそれで大切なことですが、成長するためには「高校生がやった」というレッテルがついて満足してしまっってはいけない。20～30 才にやった場合でも、そのプロジェクトが地域に活かされているか、考えたい。「高校生がやることだからまあいいか」となってしまうと甘くなる。探究はあくまで探究…。探究という言葉を再考してほしい。体験記録だけにとどまらない論文を期待しています。

##### 2) 菅波香織さんから

- ・地域の課題と自分の関心を合わせて、自分事としてとらえているのが分かりました。みなさんのネットを使った情報活用も上手でした。
- ・現状の把握として、アンケートなどをやっていたと思いますが、発表で見えてこなかった。データがもう少しあればよかった。また、印象で語られる発表も多い。「ヒントを貰えました」「印象が変わりました」というコメントには何を得たのか、どんな風に変ったのか、具体的に欲しい。
- ・みなさんが探究を主体的に取り組んでいるのが伝わりました。2つ目とも関係しますが、みなさんの探究の対象となる地域の子供、高齢者も主体を持つ存在です。コロナで難しかったと思いますが、お一人お一人の心情や意思や尊重すべきことも考えつつ、皆さんのやりたいことを掛け合わせて共創していければ素敵だと思いました。
- ・私的にドキッとしたり、違和感を覚えたワードがありました。皆さんもそれを友人らと言葉にして、対話



をしてみてください。もやもやを一人の中で消してしまうのは勿体ないです。今日の探究のあとも、対話で未来を作ることを考えていただければと思います。



## ⑥ 教員と審査員の探究交流会

昨年初めて教員と審査員の探究講習会を実施して、外部審査員と担当教員との懇談会を、発表会終了後に設定した。生徒の発表を踏まえて、日頃の指導方法や連携の在り方等について忌憚のない意見をいただくことができた。今年度は「中学3年間の探究を高校でさらにどのように伸ばしていくか?」という問いを設定し、KPT (Keep, Problem, Try) 法を用いてグループディスカッションを行った。



### 【Keep (そのまま続けたいこと)】

- ・発表の丁寧な言語化
- ・専門知と出会える場を作る
- ・率直な個人の興味を反映した探究 (中学生)
- ・とがった才能をどんどん伸ばす

### 【Problem (問題点)】

- ・審査基準が文系の方が点数に反映されやすい (理系のプロジェクトを評価しにくい)
- ・理系をフォローできるゼミ編成
- ・高入生と一貫生のゼミの接続
- ・テーマと自分自身のつながりをもっと言葉にした方がよい
- ・課題からスタートにしないこと
- ・仮説と検証を行って、課題が変わってもいいはずなのに変わらない (「課題」という言葉を使わない方がいい

いのではないか)

- ・発表時間5分は短い

### 【Try (来年やってみたい)】

- ・最終発表会で地域の人とであるのではなく、常にオープンな関係を作る
- ・学年を超えた交流・コラボ

## ⑦ 結果および今後の展望

・今年度もコロナ感染症対策のため、予定していた活動ができなくなるケースがあった。昨年と異なっている点は、Zoomなどの新たなオンラインのツールを手に入れた点である。このツールを積極的に利用し、他県の高校生とオンライン交流会を行った探究やマイクラフトを利用した探究、分科会発表の様子をライブ配信で行う探究など新機軸を導入した探究なども見られた。

・この発表会は1期生から始めて今回が5回目であるが、会を重ねるごとに発表件数が増え、調査だけでなく課題解決のための実践を進める生徒の割合が増えており、質、量ともに高まっている傾向が見られる。一方で、現実的に地域の外に出て課題解決のアクションの総量は絶対的に少ない。また、海外研修がここ2年国内の代替研修に切り替わり一定の成果は出ているが、海外研修を通じて得られる世界の課題と地域の課題を繋げて考える視点が今回の探究で見られなかったことは次年度の課題ともいえる。

・外部参観者向けにZoomによる配信を行ったが、取組そのものに対しては好意的な意見が多かった。また遠方からの参加者も多く遠隔配信のメリットを活かすことができた。一方、映像や音声の質等、配信の技術的な点は課題が多かった。次年度以降は直接来場いただくようになることを願うばかりであるが、今回培った配信ノウハウは今後も生かしたい。

・3年生はこの後、論文作成や探究活動を仕上げる期間に入るが、それらの質を高めるための機会として、全体として今回の発表会は有効に機能したと思われる。また外部の方に本校の活動の様子を理解していただく場としても効果が大きかったと思われる。次年度以降も、定着した取組として実施していく。

## 2. 4 海外研修・国内研修

### 2. 4. 1 ドイツ研修代替研修

本校では、2年次からの未来創造探究として、原子力災害からの復興や、持続可能な地域づくりについて探究を行う。この取組は、福島だけの課題ではなく、全世界が共有する「持続可能な社会づくり」にも繋がるものである。これまでの1年次におけるドイツ研修では、環境首都と呼ばれるフライブルク等の町づくりを視察するとともに、本校の海外連携校である Ernst Mach Gymnasium 校（ミュンヘン）と互いの探究を通して交流を図り、将来起こりうる世界の難題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩としてきた。ドイツ研修は本校の学びの核の一つであり、学年全体・学校全体が思考を深め、2・3年次探究にもつながる重要な機会となる。しかし、昨年度に引き続き、今年度も新型コロナウイルス感染拡大の鎮静化が見込めず、7期生はドイツ渡航を諦め国内代替研修とオンラインでのドイツとの交流を行い、学びを深めるとともに、学年全体へその成果を還元することとした。

#### (1) 代替研修内容

##### (1) 国内研修

- ① 国内のゴミ問題や放射性廃棄物など、この地域特有の課題について知識を得る。
- ② 「ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）」を掲げ、究極の持続可能な地域を追求している徳島県上勝町のゼロ・ウェイストセンターを訪問し、スタディツアーを行うと共に、地域住民と交流し意見交換を行う。
- ③ 英語による議論やプレゼンテーションの技術を身に着けるため、British Hills における合宿を行う。

##### (2) ドイツとの交流・意見交換（オンライン）

- ① 国内研修を踏まえ、ミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校の生徒とオンラインにて交流を行う。

#### (2) 実施内容

募集の段階で現地渡航はできない旨を説明した。代替事業を複数設定することで、海外研修同様の学びを担保することを約束し、多くの生徒が選抜面接に臨んだ。なお、生徒の選考には以下のような課題を設定した。

- ① ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）についてのあなたの考えを明らかにすること。
- ② 持続可能な社会づくりについて全世界が共有する目標である SDGs の 17 の目標のうち、本研修を通じて考えを深めていきたい目標を明らかにすること。
- ③ 本研修での学びを今後の学校生活にどのように生かしていこうと考えているかを明らかにすること。

本研修の目的を自覚し、学校の代表としてドイツと交流し、そこでの学びを地域や学校に積極的に還元する意志を持った 12 名の生徒たちが選抜された。

#### 代替事業① 語学研修

##### (1) ALT による SDGs 研修・英会話

期日：令和3年12月～2月

SDGs を英語で学ぶためのテキストを購入し、本校 ALT による事前講義を行った。講義では知識のインプットと語彙力の向上をねらいとし、そこで学んだことについて自分の考えを英語で話せるよう、ディスカッションやプレゼンター



ションなどを行った。また、昼休み時間に加えて、コロナ休校期間中や入試期間中は Zoom による英会話を実施した。3人グループの少人数での英会話の時間で、実践的な力を鍛えていった。

##### (2) ブリティッシュヒルズ(以下 BH)研修

期日：令和4年1月5日(水)～1月7日(金)

現地渡航ができない中で、3月に予定しているドイツとのオンライン交流に向けて英語でプレゼンテーションや議論を行う練習が必要となった。そこで、英国の文化・マナーに触れながら活きた英語を学べる県内の BH にて2泊3日の語学研修を行った。

ドイツの高校とはゴミ問題やリサイクルなどの環境問題について意見交換を行う予定であるため、SDGs を用いたレッスンを中心に、最終的にはプレゼンテーションを作成し、発表できるようなプログラムを実施した。

生徒達は初めこそ All English の授業に戸惑い、上手く反応できずにいたが、夜に宿舎内の Meeting Room に集合し、遅くまで SDGs にまつわる語彙や表現をシェアする様子も見られた。

最終日の発表では、SDGs 目標達成に向けた内容を組み込んだ街をデザインして発表を行った。生徒達は各々自由な発想で町をデザインし、楽しみながら自分達が理想とする社会について意見を発表することができた。



最終日の発表の様子



#### 代替事業② ドイツとのオンライン交流

##### (1) e-Twinning を使用した交流

ドイツにて交流予定だった、ミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校とオンラインによる交流を続けた。e-Twinning というサイトを使い、お互いに自己紹介や簡単な投稿を通して交流を深めた後、ドイツの高校生2名と本校生徒2名のグループを作り、あとはそれぞれに個別



に連絡を取り合うようにした。生徒達の中には Instagram など写真や動画をシェアし合う生徒もおり、デジタルネイティブならではの速さで距離を縮め、仲良くなっていた。大変楽しそうに交流しており、現地で会うことが叶わなかったことが尚更に悔やまれた。

e-Twinning でトピックを作成したり、アンケートを取ったり、チャットのやりとりをする機能もあったが、時差の問題もあり、即座の生きたやりとりにならなかったことと、生徒達にとっては使いにくく、なかなかこちらから話題を提供したりすることができなかった。そのため、グループでのやりとりはほとんどが Instagram などの個々のものになってしまい、オープンなディスカッションなどがあまりできなかった。

## (2) Virtual Homestay

期日：令和4年1月9日（日）

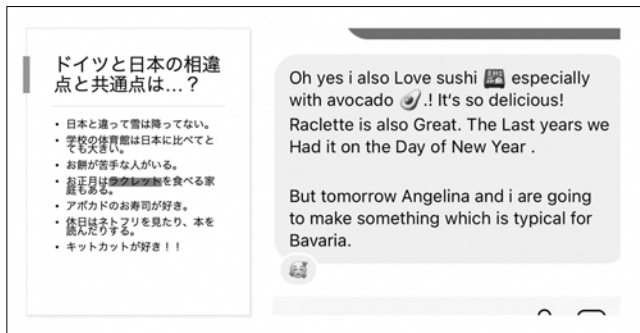
BH 研修の直後にドイツの高校生との Virtual Homestay を実施した。直前の BH 研修時に一度顔合わせを行った。お互いに顔を合わせて自己紹介をした。

Ernst Mach 校も新型コロナウイルス感染拡大により休校が相次いでおり、この日も学校からではなくそれぞれの家からの参加であったため、お互いのコロナ事情について情報交換をした。



Virtual Homestay 当日は、それぞれに Zoom のルームを割り当て、各家庭から接続して交流を行った。日本時間の 19:30、ドイツは 11:30 から、お互いに Lunch と Dinner を食べながらの交流となった。生徒達は家族や、お互いが食べているものを紹介したり、お互いの部屋を案内したりと楽しい時間を過ごした。

その後、振り返りではそれぞれがどのような話をしたのか共有し、スライドにまとめて共有した。スライドから、生徒達がそれぞれに交流を楽しんだことが伝わる内容だった。お互いの国の習慣などの話になると、生徒達も驚くことが多かったようで、日本での当たり前が世界では当たり前ではないということをドイツとの交流を通して学んだようである。それぞれにドイツの高校生から聞いたドイツの習慣や文化で驚いたことを共有していた。



生徒達の感想は以下の通りである。

「事前にいくつか話題を用意していたため、沈黙にはならなかったが、伝えたいことが伝えられない歯痒さを感じた。」

もっと語彙力や文法知識を身につけて、ジェスチャーを交えながら会話できるようにしたい。」

「共通の話題がたくさんあって、話し足りなかった。英語が上手く話せるか不安だったけれど、楽しく文化交流することができた。いつか絶対に会いたい！」

「自分が言いたいと思ったことはなんでも言うべきだと思った。『相手に伝えられるか不安』『伝わらなかつたら恥ずかしいから意見を言わない』という考えはもっていないと思った。英語が話せない僕でも1時間半もコミュニケーションを取れたので意見や質問の大切さがわかった。」



## (3) Online Discussion

期日：令和4年4月（予定）

会場：本校協働学習室

この後、次年度の4月にオンラインディスカッションを行う予定である。テーマは①SDGs12「つくる責任、つかう責任」から、お互いの町の取り組みについて、②お互いの町についての紹介、③ロシアのウクライナ侵攻におけるドイツの状況などを予定している。現在、お互いの町を案内するビデオを作成したり、プレゼントを送りあったりと準備を進めているところである。これまでの学びのアウトプットと、ドイツの高校生との意見交換が英語で円滑に行えるように準備を進めている。



## 代替事業③ 徳島県上勝町研修（オンライン）

期日：令和4年1月17日（月）

講師：野々山聡氏（合同会社パンゲア CEO）

徳島県上勝町は、持続的な循環型社会を目指し、2020年までにゼロウェイスト達成を公約に掲げてきた。同町はゴミを45分別することで既に再資源化を8割達成しているが、その目標に向けてはゴミを処理する側の体制だけではなく、製品の供給側の意識や、生産・販売・消費の関係、ひいては私たちの暮らし方そのものを考え直すことが必要になる。

昨年度に続いて、国内代替研修として徳島県上勝町を訪問する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、中止となった。ここでは、訪問予定だった頃に事前研修としてオンラインで行った内容を記す。



### (1) ゼロウェイストセンターについて

徳島県上勝町にあるゼロウェイストセンターは、町内



唯一のゴミ収集所である。上勝町はゴミ収集車がなく、住民が直接ゴミを持ち寄りその場で分別する。それぞれのゴミや資源の行き先やその後、1kgあたりの処理にかかる金額も明示しており、捨てる側も意識をするようになるという仕組みである。センターに併設されている宿泊施設「HOTEL WHY」ではゴミゼロ生活を体験できる。今回、体験はできなかったものの、様々な取り組みを知り、サーキュラーエコノミー（循環型経済）と、コラボティブエコノミー（共同経済）の両側面が実現されている場所から、これからあるべき町の姿としてのヒントをいただいた。

## (2) 株式会社いろいろの「葉っぱビジネス」について

上勝町は、人口が約1,700人、町の面積の86%が山林である。さらに65歳以上の高齢者の割合が人口の半分以上を占め、県下でもっとも高齢化比率が高い町である。そこで、高齢者が里山の葉っぱや花を収穫し、料理の「つま」として出荷する「葉っぱビジネス」で生き生きと働き、年間2億円以上を売り上げている。町の高齢化や、自然豊かな町という点において双葉郡と共通する部分が多く、どうすれば地域住民が生き生きと暮らし、若者が戻りたくなる町になるのか考えた。

生徒達は事前に第一原理について予習をして今回の研修に臨んだ。第一原理とは、基本的前提のことである。上勝町と広野町の共通点として、豊かな自然が挙げられた。この第一原理を魅力に変えていくには環境リテラシーが大切である。地域の資源を自分で分析し、理解した上で、それを使ってどのように地域の魅力を発信するかということが大事であるという言葉は、これから探究に進む生徒達にとって大きなヒントとなった。生徒達は研修を通して広野町の第一原理を見つけ、それを活かすプロジェクトを考え、上勝町民に発表する予定であった。今後の探究活動に期待したい。



## 代替事業④ NPO 法人 ザ・ピープルでの研修

講師：吉田恵美子氏（NPO 法人ザ・ピープル 理事長）

### (1) 校内事前研修

期日：令和4年2月28日（月）

3月21日（月）イベントでの研修

「特定非営利活動法人ザ・ピープル」は、1990年いわき市内で設立された団体である。身近な生活環境の問題のひとつであるゴミ問題の解決に向けて、古着のリサイクル活動に1992年から取り組んでいる。

今回、吉田氏を講師に迎え、古着に着目したゴミ問題についての研修を行った。古着などの繊維製品のリサイクル率は全国平均で20%にも満たない。ザ・ピープルでは古着リサイクル事業を行っており、現在90%以上のリサイクル率を達成しているという。この活動をいわき地域内に留めることなく、他地域にも広く共有し、古着をゴミとして燃やさない社会に変えることが目標である。

**アパレル業界の環境への具体的影響**

- ◆1本のジーンズの生産に必要な水  
≒約7,500ℓ≒平均的な人が7年かけて飲む水の量
- ◆ファッショ業界が毎年使用する水の量  
≒300億ℓ≒500万人の生存を可能にする水の量
- ◆ファッショ業界が出す廃水≒全世界の20%
- ◆衣料品と履物の製造により生まれる温室効果ガス  
≒全排出量の8%（「これまでどおりのアプローチを続ければ、業界からの温室効果ガス排出量は、2030年までに50%近く増大すると見られる」- エア・トリップ 国際環境計画消費生産課）
- ◆埋め立てに使われたり、焼却されたりしている繊維  
≒ゴミ収集車1台分/秒

Copyright © UNIC, All Rights Reserved.

### (2) ザ・ピープル 諏訪倉庫での実習

期日：令和4年3月12日（土）

実際にザ・ピープルの倉庫を訪れ、古着の仕分けのボランティアを行った。県内の古着回収BOXから集められた衣類を、様々な用途に分類していった。倉庫内の衣類の量に衝撃を受けたが、まだ使える衣類が多く、生徒達は普段自分達が身に付けている衣類から大切に長く着ることの大切さを学んだ。ファストファッションが流行っている一方で、それらの衣類を低賃金で作っている発展途上国の人達がいること、我々にとってはゴミでも、他国の人にとってはまだまだ着ることが出来る貴重な衣類であることを知った。



### (3) 「衣」と「食」について考える SDGsカードゲーム体験会への参加

期日：令和4年3月21日（月）

吉田氏が新たに立ち上げた「フード&クロージングバンク事業」のPRイベントに参加した。古着リサイクル事業の他に、震災後の新たな地域課題となりつつある生活困窮者支援の目的でスタートしたフードバンク事業を組み合わせた事業で、地域内で生活困窮に悩む方を「衣」と「食」の両面で支える仕組みづくりを目指している。循環型社会をテーマとする古い着物を活用したステージショー等に加えて、2030SDGsカードゲームの体験を通してみんなで「衣」や「食」の在り方を考えた。



カードゲームでは、他の参加者達とコミュニケーションを取りながら、経済・環境・社会をバランス良く成長させていくことの難しさを体験した。展示コーナーでは、市民から回収した古着を服飾専門学生が新たにリメイクした衣装が展示されていた。ファッションに関心のある生徒が熱心にデザイナーに質問し、探究活動のヒントを

もらっていた。吉田氏のご厚意により、最後のショーにも特別出演させていただき、出演者の皆さんとステージで踊り会場を盛り上げた。

### 代替事業⑤ 国際理解教育×哲学対話

ロシアが2月24日にウクライナに侵攻し、戦争が始まった。Ernst Mach Gymnasium校と連絡を取り合う中で、ドイツにもすでにウクライナからの難民が流れてきていること知った。生徒達も、隣の隣で起きている戦争に胸を痛めているが、やはり戦争を知らない世代であるため、何が起きているのか知りたいということで勉強会を開いたそうだ。そこで、オンライン交流の際にドイツの高校生とウクライナ問題について意見交換をすることにして、我々もまずは対話による勉強会を開いた。

#### (1) 世界史教員による哲学対話

期日：令和4年3月16日(水)

事前に宿題として、ウクライナに関する問いを1人50個考えてきた。生徒達からは以下のような問いが出た。

なぜ戦争を続けるのか？ 日本が巻き込まれる可能性はあるのか？ 中国はなぜ沈黙しているのか？ ロシアは戦争のルールを守っているのか？ なぜロシアは制空権を奪いに行かないのか？ 戦争後、ウクライナが復興するのに何年かかるか？ ロシアのメディアはどのような報道をしているのか？ なぜロシア軍はチェルノブイリ原発を抑えているのか？ ロシアは核兵器を使う可能性が本当にあるのか？ 日本がウクライナに防弾チョッキを提供することは憲法違反にならないのか？ 日本の報道の仕方は本当に公正なのか？

今回の課題「問いづくり」で生徒達が出した600の質問から、調べれば答えが出るものを除き、話し合いたい本質的な問いを選んだ。

ロシア国内でのプーチン支持者に年配者が多く、若者が少ないことが、情報の入手方法の差から来ているのではないかという意見から、メディアリテラシーの話にまで話が及んだ。現在ロシアやウクライナでインターネットが遮断されている箇所があるという情報を受け、ネットワークが遮断されるとどうなるのか想像した。世界から見て、現在ロシアが情報鎖国になっているという話から、高遠菜穂子氏が講演で仰っていた「日本は情報鎖国」という言葉と繋げて、日本はどのようなだろう？という話にもなった。また、歴史の上で独裁者を生んだ過去があるドイツ人はロシアのことを複雑な思いで見ているのではないか。自分の立場をはっきりさせずに中立でいることは果たして本当に良いことなのか等、オンライン交流会で是非ドイツの高校生と話し合いたい話題がたくさん出た。

#### (2) 高遠菜穂子氏との哲学対話

期日：令和4年3月20日(日) オンライン

「なぜ戦争は起きるのか？なぜ止められないのか？」

- ① 講義「国民は望んでいないのになぜ政治家は戦争をするのか？」柳澤協二氏(元内閣官房副長官補)
- ② 講義「国連や国際法では戦争は止められないのか？」伊藤和子氏(弁護士/ヒューマンライツナウ事務局長)
- ③ BORを使った哲学対話  
講師：神戸和佳子(北陸大学経済経営学部講師)

本校1年次の国際理解教育において、毎年ご講演いただいている高遠菜穂子氏によるオンラインでの哲学対話イベントに参加した。



Inputとしての講義を聴いた後、イラク戦争を知らない世代である10代の参加者の他に、世界中の様々な年齢・立場の方も交えて哲学対話を行った。

#### 【生徒感想】

・「なぜ戦争がやめられないのか」というテーマで対話をした。主に、①罰則規定が弱いから、②戦争のイメージが持ちにくいから、③人々が強い国家を求めると、という話になった。また、見過ごされている人権侵害や戦争について考えていきたい。ウクライナ情勢が深刻化してから、それまで騒がれていたタリバン政権や中国のウイグル自治区の問題等について考える機会がなくなってしまった。1つの問題だけに目を向けるのではなく、世界で起きている問題にむけてもアンテナを広げていきたい。

・「自分家族や身近な人が殺された場合、武器を持って闘うか」という議題で対話をした。自分だったら善悪の判断がつかなくなってきくと報復をしようとしてしまうと思い、「闘う」を選択した。様々な人の考えを聞かなかで、自分がそうってしまったとき、こういう人達に止めてほしいとも思った。また、自分がそうってしまった人達を止められる人間になりたいとも思った。それができるのが理性なのではないか。そしてその理性は本を読んだり勉強をしたり対話することで身につけられるのではないかと。

最後に生徒の心に深く刺さった高遠氏のメッセージは以下である。「米兵やイラクの武装した兵士こそが戦争の被害者である。自分も同じ立場になった時、人を殺さずに自分を止められるのか。自分は自分のことを平和主義者だと信じたいが、私の中にもそういう残虐性を持っていて、自分は反射的に人を殺してしまうかもしれない。それを強く自覚することで私は武器を持たない選択をしたい。『私は違う』とは絶対に言い切れない。なぜこの人はその選択をしてしまったのかということを考える。それが私がこれまでの経験から学んだことである。」

#### (3) 成果と課題

コロナの影響により2年連続で渡航が叶わず、生徒達の大きな学びのチャンスを失ってしまった。しかし、同じ目的の下、国内代替研修に置き換えて実施することができたことについて、感謝申し上げたい。

国際交流の第一歩は、自分の国や地域のことを積極的に情報発信することである。しかしながら、毎年、基礎知識のインプットと英語力の向上については課題がある。国際理解教育の高遠氏も述べていたが、知識不足や表面的な情報だけで何かを意見することは、新たな対立や分断を生んでしまう。今後も双葉郡の高校生として、分断や対立・差別や偏見と闘うべく情報発信を行っていくためには、正しい情報リテラシーが必要である。

今回、様々なご協力の下生徒達は沢山のインプットができた。4月に最後のドイツとのオンライン交流を控えているが、ドイツの高校生と学びを共有し、意見を交換することで視野を広げ、難しい問いの中にあっても対話を諦めない人材育成の要となる研修としていきたい。



## 2. 4. 2 ニューヨーク研修代替研修

本校が SGH 指定校であった期間から続く本事業は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い中止や代替を余儀なくされている。SGH 指定最終年度となった一昨年度(本校 4 期生)およびグローバル型初年度の昨年度(本校 5 期生)、そして今年度(本校 6 期生)も渡航を断念した。このような状況であっても、グローバル型事業目標に立ち戻り、国内にいながら学習成果を最大限担保できる機会として、ブリティッシュヒルズ語学研修・留学生向け浜通りツアー・UNIS-UN2022 (オンライン)・UN 職員とのディスカッション (オンライン、来年度予定) を実施した。

### (1) チームビルディング

本研修は、教員主体の語学研修や、探究活動の広報活動とは異なる。地球市民としての生徒たちが、能動的市民性を大いに高め、地域や世界に貢献していくために生徒主体で進めるプロジェクトである。

本研修のミッションを自覚し、国際社会で提言をしたという意志を持った 12 名の生徒たちが選抜される。原子力災害からの復興にかかわる自分たちが、世界の人々とともによりよい未来を目指すためには、どのような相手と議論をし、どのように提言をすべきかから生徒たちは議論を重ねる。研修前後には積極的に地域と学校に学びの成果を還元する。

参加者 12 名を選抜する際には、以上の観点を踏まえた内容および自分の探究と地域・世界とのつながりについての志望理由書を重要視し選抜した。

また、今年度は、渡航断念になった場合には、外国人に双葉郡地域を案内するという企画に切り替えることを想定しており、結果的にそのようになった。

### (2) 実施内容① (ブリティッシュヒルズ研修)

期日：令和 4 年 1 月 5 日(水)～1 月 7 日(金)

県内にあるブリティッシュヒルズ (福島県岩瀬郡天栄村) は、語学研修を中心とした英語のイマージョンプログラムを提供しており、プレゼンテーションや議論を行う研修としては最適である。本研修では特に、建設的に議論を進める方法や重要表現と、効果的なプレゼンテーション方法および質疑応答の仕方について学んだ。

本研修は英語の運用能力を高めるためという要素が強いが、今後の留学生との交流、UN 職員とのディスカッションにも繋がられるよう、一方的なプレゼンテーションではなく、それに基づいた相手からの質疑応答および議論も効果的にできることを最終目標とした。実際、本研修の最終日に行う Public Presentations では、例年だと発表することに留まるが、今回は質疑応答を充実させること、また発表に基づいた議論の題材を聴衆側に投げかけさせることで、一方通行ではなく、発表者と参加者

とが意見を言い合える場を作ることができ、結果的に議論のファシリテーションをも英語で行う力も育成することに繋がった。

### (3) 実施内容② (留学生向け浜通りツアー)

期日：令和 4 年 3 月 7 日(月)～3 月 10 日(木)

NY への渡航が断念された時、外国人向けに双葉郡ツアー (当初の仮称) を生徒が立案・企画・実施し、双葉郡の抱える課題を英語で説明するという研修に切り替えた。本校設立の経緯および双葉郡が依然として抱える諸問題について理解を深めるとともに、英語による説明によりプレゼンテーション能力の醸成および、その後の UNIS-UN や UN 職員との議論にもつながると考えたためである。

今回の対象は、APU 立命館アジア太平洋大学 (大分県) の留学生 (国籍：中国・タイ・ベトナム・ウズベキスタン・パキスタン・バングラデシュ・パレスチナ・ウガンダ・オーストラリア) で、本校併設の中学校が修学旅行で交流のため訪問する予定であったが、コロナのまん延防止措置により叶わなかった背景もある。

この研修の実施に当たり、主に 2 つの事前研修を行った。

#### ※事前研修① 文献の輪読会

何のためにツアーを企画するのか等のコンセプトを決めるにあたり、参考とするのに相応しいと考える文献を提供した。

ブレイディみかこ『他者の靴を履く』

小松理度『新復興論』

ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

小手鞠るい『ある晴れた夏の朝』

このうち、上の 2 冊を役割分担による輪読を行い、UN ディスカッションでも重要となる「共生」という観点を深めた。残り 2 冊は推薦図書扱いとした。



## ※事前研修② 協力者への取材を含めた下見

ツアーの実施およびその説明にあたり、どのような場所でのどのような内容を伝えるのかを、生徒自身の目線で事前の下見を行った。参加者の中には双葉郡や相馬市出身がいるが、震災当時は幼稚園の年長で記憶もあいまいであり、また大半を占めるいわき市出身は、双葉郡のことについてそもそも知らない現状があり、綿密な下見が必要であった。

その際大事にしたのが、地域の地理・現状等に詳しい人物への取材である。自らが留学生に説明するという立場を想定して、現地の事情に詳しい人の話をどのように表現すればいいのか考えることで、その地域についての理解を深めることができるからである。

以上のような事前研修を踏まえ、本研修は以下のような行程で行った。

### ○1日目 (3/7 月)

東日本大震災による複合的震災の象徴である浪江町の請戸小学校を訪れ、その被害や課題を英語で説明を行った。

その後、檜葉町にある地域交流センターのならばCANvasにて、留学生と本校生がゲーム等を通じて親睦を深めた。

### ○2日目 (3/8 火)

朝は本校高校生と一緒に登校した後、中学生の探究発表を聴講し、お互いの親睦を深めた。

その後、帰還困難区域に指定されている大熊町を訪れ、時が止まった建物や中間貯蔵施設を見学した。

午後は、野馬追を体験するため、南相馬市の銘醸館で戦国時代の足軽や武将に扮し、練り歩いた。

### ○3日目 (3/9 水)

朝は富岡アーカイブミュージアムで、原発が誘致される前の町の様子や、原発設置後や原発事故について学んだ。

その後、双葉町を訪れ駅や伝承館周辺の様々なアートを見学し、それに込められた想いについて考えた。

お昼は、川内村のかわうちの湯で地元特産物を堪能し、天山文庫では伝統的な茅葺屋根の建物の造りなど日本文化の深さについて学んだ。

最後の行程として、檜葉町の天神岬で東日本大震災の犠牲者に追悼の祈りを捧げた。

### ○4日目 (3/10 木)

最終日は、これまでの行程を振り返り、「観光業」「ビジネス」「SNS」「雇用」という観点で双葉郡に足りないものについて議論し、閉会となった。

## (4) 実施内容③ (UNIS-UN2022 オンライン参加)

期日：令和4年3月24日(木)～3月26日(土)

今年度のUNIS(国連国際学校)もオンライン参加となった。例年はニューヨークにある国連本部で、国連職員の子どもたちが通う学校であるUNIS-UNの生徒や世界各地から集まる高校生徒と一緒に、世界が抱える諸問題について議論する予定であった。オンラインでの参加とはなったが、講演・ディベート・ワークショップと形式が豊富であったのと、オンライン会議のブレイクアウトルームを多用し、発言がしやすい環境であったため、発言・質問を積極的に行った。

### 今年度のテーマ：Food for Thought : A Sustainable Approach to Food Security

#### ディベート議題

Motion 1: “The fast-food industry has had positive effects on reducing food insecurity.”

(ファーストフード産業は食糧不足問題に良い効果をもたらすか)

Motion 2: “Food secure nations have the responsibility to provide food for undernourished populations.”

(食糧安定国家は栄養不足の人々に食糧を与える義務がある)

#### ゲストスピーカー

Seth Goldman : Honest Tea, Eat the Change や PLNT Burger の創設者で植物ベースの料理を提供する。

Esther Penunia : アジア農民協会 (AFA) の事務局長で、小規模な家族農園経営の支援を行う。

Abby Maxman : Oxfam America の CEO。世界の貧困と不正をなくすための人道支援と開発を行う。

Mary Ellen McGroarty : アフガニスタンの世界食糧計画(WFP)で、食糧援助を行う。

Mai Thin Yu Mon : ミャンマーの権利活動家として、先住民の土地と天然資源の尊重と保護にあたる。

#### ワークショップ (参加したもののみ)

Diet Culture and Body Image, Evolving innovation and food, Business pitch Simulation, Jeopardy, United Nations Virtual Tour, Bagels: Nurturing New York, Sustainable Innovation in Urban Agriculture, Latin American Food as Art, Food and Climate Change Role Play

## (5) 実施内容④ (UN 職員との議論オンライン参加)

期日：令和4年5月21日(土)予定

新型コロナウイルス対策に係るまん延防止措置が実施直前まで延長され、浜通りツアーの準備等にかかなりの時間を要したこと、および、浜通りツアーやそれに参加した留学生の感想等を元に、地域・世界が抱える問題にどのように対処していくべきかについての議論を十分に振り返り、今後の探究学習等に生かしていくため、年度内の実施を見送り、改めて来年度5月に実施する事とした。

## (6) 成果と課題

### チームビルディング

今回のチーム編成に当たっては、いわゆる「フリーライダー」を作らないよう、誰もが責任ある立場から物事を進めたいという観点から、議論をまとめる司会の輪番制、参考文献の輪読の割振り・プレゼン、各自の探究内容の英語プレゼンの深化等により、チームとは言えませんが個々のスキルアップの重点を置いた。英語力の不安を感じる生徒もいたため、朝・昼・放課後の時間をうまく活用し、個別指導に当たった。

しかし、英語力には差があり下位の生徒の練習にかなりの時間と労力を費やした。普段の授業がどれだけ大切かを思い知らされた。普段の授業において、プレゼンテーションやそれに基づいた質疑応答の言語活動のやり取りをすることの重要性を感じた。ふたば未来学園らしく、その場しのぎではない英語力を醸成するカリキュラムが、普段の授業の中で求められていると感じた。

### ブリティッシュヒルズ研修

主に英語の運用能力を高めるためのプログラムであったが、単に提供されるプログラムをこなせばいいという考えにならないよう、本研修での最終目標を「自分の探究内容を英語で発表し、それへの質疑応答を行い、それに基づいたトピックによる聴衆と議論をする」と設定したこと。これにより、発表前日は夜遅くまで原稿書き・発音練習等の準備に勤しんでいた。また、「聴衆との議論」を大切にすることで、一方通行ではない、本物の英語力が問われるため、苦労した生徒も多かったが、今後の英語学習への大きな動機付けとなった。

### 留学生向け浜通りツアー

代替研修の目玉である本研修は、「いかにして福島の問題を『共事化』(小松理虔氏の造語。「共感」と同義)でできるか」というコンセプトのもと、双葉郡など浜通り地

区の光(魅力)と影(課題)を体験によって感じてもらうというものだった。昨年度のUNDPの岸守氏の指摘にもあったように、例年のような単に発信するだけでなく、実際のアクションによる発信が求められていた。

そのような折、本校中学校が修学旅行先としていた(新型コロナの影響で断念)APU立命館アジア太平洋大学の留学生から福島を訪問したいという打診があり、多国籍を背景とする方々にとって浜通りの光と影がどのように映るかを実践検証するのに格好の機会だと捉えた。

ツアー中の留学生の反応は驚きの連続であった。まず、影の部分では複合的災害(地震・津波・原発事故)の象徴としての請戸小学校、帰還困難区域の中で当時のままの熊町小学校、人の住んでいない廃墟、広大な中間貯蔵施設など、まだまだ課題が山積している状況を目の当たりにして、「私の知っている日本ではない」という言葉が印象的であった。

また、光の部分では、浜通り地方の食の豊かさ、野馬追の追体験としての甲冑仮装、日本伝統文化の奥深さなど思ったよりも留学生の関心は高かった。

しかし、その場の楽しさを単なる楽しさで終わらせるのではなく、今回のツアー全体の中で福島の課題を提示するのにその楽しさがどう作用したのかを分析する必要がある。特に、福島と世界の課題との結び付けにおいて本校探究学習はいまだに発展途上のため、本ツアーを今後どう探究学習に生かしていくかが大変重要になる。この点については令和4年度5月に行われるUN職員との議論において本校生徒が作成するプレゼンテーションに組み込む予定である。

### 2022 UNIS-UN 会議オンライン参加

今年度もオンライン参加となったが、ブレイクアウトルームの多用で、講義・ディベート・ワークショップ等の各活動において、発言や質問がしやすくなった。そのためか、日を追うごとに発言・質問の回数が増え、議論に参加しようという姿勢が見られた。また、基調講演となるゲストスピーカーによる講義についても、前半は受け身になっていたが、質問を全体で取り上げて欲しいという一心で、後半では講義に備えるために、ゲストスピーカーについて調べ、それを全体で共有し、候補となる質問を考える等の準備を行った。講義の本番では、その努力が報われ質問を取り上げられたことで、改めて講義についての事前準備がどれだけ大切かを実感したようである。

### 2. 4. 3 広島研修

広島研修では、原爆被害からの復興と平和に向けた取り組みについて学習するとともに、広島県の高中生との交流を通して、双葉郡の課題を国内の他地区の課題と重ねながら、課題の本質を探る機会とした。

初日は原爆ドームと平和記念公園を見学した後、広島県立広島国泰寺高校においてエネルギー問題について意見交換を行った。二日目は、旧陸軍被服支廠、広島平和記念資料館を見学した後、被爆体験講話、広島市立舟入高校原爆劇鑑賞を行った。3日目は世界遺産厳島神社のある宮島を見学し、帰路についた。

#### (1) 日程・参加生徒

10月に募集を行い、事前研修を経て12月10～12日の2泊3日で研修を行った。生徒は2年次14名参加(男子4、女子10)。

#### (2) 実施内容

事前研修として、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター主催のシンポジウム「広島原爆ドームの世界遺産登録と1F 廃炉の将来像を考える」にオンラインで参加した。広島平和記念資料館の元館長の原田浩さんによる講演や同学芸課職員の菊楽忍さんの発表は、広島への原爆投下の状況や、戦後の原爆ドームの世界遺産登録に向けた動きなどを詳細に伝えるもので、広島訪問前に戦争・原爆・遺構についての基礎知識が得ることができた。

初日は広島到着後すぐに、原爆ドームをはじめ、平和記念公園内を見学した。同級生の協力を得て作った折り鶴の献納も行った。その後、広島県立広島国泰寺高校へ移動し、生徒交流と意見交換を行った。



生徒の感想…

- ・他校の高校生同士で日本の社会問題について対話することで、色々な視点を知ることができたり、高校生ならではの考えもたくさん話したりできた。
- ・日本の10年後、20年後を創っていくのは自分たちの世代だと思う。
- ・今大人が私たちの未来について考えて、エネルギー問題についても考えてくれている。私達もエネルギー問題について考えた方がいい。

二日目は朝に旧陸軍被服支廠を見学した。シンポジウムで知り合った多賀俊介さんにガイドを引き受けていただき、広島市内をバスで移動する途中も各所にて戦時の状況等について案内していただいた。その後、広島平和記念資料館を見学し、追悼平和祈念館にて山本玲子さんによる被爆体験講話を伺った。午後は、広島市立舟入高校を訪ね、演劇部による「ケイショウ ～『ある晴れた

夏の朝』から考えたこと～」を鑑賞させていただいた後、生徒交流を行った。夕食後は、舟入高校の前身である広島市立高等女学校(市女)の職員・生徒で原爆の犠牲となった方々を慰霊するため、ホテルのそばに立つ広島市立高女原爆慰霊碑を訪ね、手を合わせた。

生徒感想…

- ・この場所だけ時間が止まっていて、現代から被爆当時のことを想像させてくれる。何人もの人たちが助けを求めてやってきて亡くなった場所、爆風から身を守ってくれた場所…、色々な思いが詰まっていた。
- ・当時幼かった後輩たちには震災の記憶がないが、広島若者のように、体験者の記憶を言葉で聞き、表現し、受け継いでいく、「語り手の語り手」になることはできる。
- ・劇中の「原爆投下について肯定派でも、否定派でも、考えるのをやめないでください」というセリフが印象に残った。原子力発電所や処理水海洋放出への賛否についても同様で、他人事とってしまうのが一番いけない。



ホテルでは一日ごとに研修の学びについてグループで振り返りを行った。自分では言葉にできなかった思いが他人の言葉を聞くことで言語化できるようになったり、研修中に感じたモヤモヤを徹底的に議論することで少しずつはっきりさせることができるようになったりと、充実した対話の時間となった。平和、伝承などについて、一人ひとりが自分の思いを言葉にできるようになったのは大きな収穫であった。三日目は宮島を見学した。

後日、広島国泰寺高等学校の皆さんと、「原子力エネルギーを今後どう活用していくかをともに考える」をテーマにオンラインで意見交換を行った。

研修成果の報告の機会として、第9回ふくしま学(楽)会に参加し、代表生徒3名が研修での学びを報告した。



## 2. 5 発表・交流

ここでは外部団体が主催する発表会への参加や他校との交流についてまとめる。

### 2. 5. 1 ふくしま学（楽）会および関連学会

ふくしま学（楽）会は早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターが主催する学会である。世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島の復興について考える場として毎回多くの方が参加している。今年度も昨年度同様にオンラインで2回実施された。

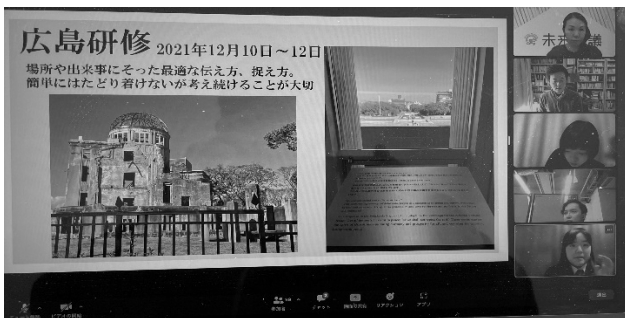
#### ① 第8回ふくしま学（楽）会（7月25日（日））

今回のテーマは「福島の教訓を考える：福島から学ぶことは何か」をテーマとして、震災から10年の節目の意味について議論をした。第7回の発表(2021年1月)からさらに探究を進めた生徒がその進捗状況や考察について「マイクラでつくる双葉郡」「エネルギーからエコロジーへ：シビックプライドを形成する環境事業」というテーマで3年生の6名が発表を行った。



#### ② 第9回ふくしま学（楽）会（1月30日（日））

第9回では1F 廃炉の先とこれからの対話をテーマとして、本校の広島研修に行った生徒が「広島視察を通じて学んだこと」というテーマで研修の成果を発表した。また、第2部の「福島の経験を学び、語り継ぐ絆組みを考える」では早稲田大学の学生との交流を行った社会起業部の生徒から「中高生と大学生との対話の報告」の発表があった。高校2年生を中心に参加した12名の生徒たちは、オンラインでのブレイクアウトセッションでも大人の参加者に負けないような対話を繰り返した。



早稲田大学ふくしま広野未来リサーチセンター関連行事として、以下の行事にも生徒が参加した。

#### ③ シンポジウム「福島復興と国際教育研究拠点に関する地域対話」（7月4日（日））

国際教育復興拠点の第5分野「原子力災害に関するデータや知見の集積・発信」をテーマに本校の中高生18名を含む95名の参加者がオンラインでのシンポジウムに参加した。また、3名の生徒が「ふたば未来学園から：国際教育研究拠点の第5研究分野をめぐって」というテーマで発表を行い、学校にいる生徒とオンラインで参加している一般参加者との対話を行った。

参加した本校の中学校の生徒から国際教育研究拠点について「地域との関係が深くなければ、地域住民の信頼や協力は得られない。小中高生との連携も大事であり、地元の中학생や高校生が参加するだけでなく、他の地域の中高生も参加し様々なディスカッションができる場になったら良い」という発言があったことが印象的である。

#### ④ シンポジウム「広島原爆ドームの世界遺産登録と1F 廃炉の将来像を考える」（11月14日（日））

第8回ふくしま学（楽）会で地域の方から1Fを負の遺産として捉えるのではなく、福島復興の象徴として1F世界遺産（文化遺産）登録を行うための最初の取り組みとして、このシンポジウムがオンラインで開かれた。本校からは広島研修に参加する生徒12名が事前研修の位置づけとして本シンポジウムに参加した。



また、本校教員2名もパネラーとして参加した。元広島平和記念資料館の館長を務められた原田浩さんによる「原爆ドームの世界遺産登録と広島市ピースツーリズム」という講演は、広島と福島という原子力災害に見舞われた二つの都市を繋げて考えるための示唆に満ちたものだった。

ふくしま学（楽）会は本気で地域課題に取り組む大人たちと共に議論する貴重な機会である。また、生徒のテーマについて継続的にアドバイスをいただく人脈を築く場としても機能しているため、今後も活用したい。

## 2. 5. 2 ふるさと創造学サミット

### (1) 「ふるさと創造学サミット」について

双葉郡8町村内の各学校で行われている「ふるさと創造学」の取り組みを共有し、子どもたちの学びの場となるのが「ふるさと創造学サミット」である。例年であれば、地域間の交流を生み出すイベントとして盛大に開催されるが、コロナ感染症対策のために今年度もオンラインにて実施された。

### (2) 実施内容

本校からは、チアで双葉郡を元気にする「Let's cheer up ふたば!!」というプロジェクトを行っている高校2年生の生徒が代表として発表を行った。中学生は「双葉郡の魅力の発見・発信」というテーマで発表を行った。オンライン上でも積極的に意見交換を行う様子が見られ、双方の学びになったと考えられる。



また、全体企画では、福島県国際交流協会の吾妻久先生による「中高生のためのSDGs」というワークショップに参加し、「World Shift」について考えを深めた。社会の課題や理想の未来を言語化できずに悩んでいた生徒も、自分たちの身近な生活に視点を置くことで、持続可能で平和な世界へのシフトを宣言できるようになった。



### (3) 成果と課題

本サミットは双葉郡内の小中学生と高校生とが交流できる貴重な場である。オンラインという限られた環境であったが、双葉郡で学ぶ児童生徒達が、お互いにどのようなことに取り組んでいるのかを共有できるきっかけとなった。

その一方で、貴重な交流の場を活かしきれていないという声も挙がった。学びの成果を発表したり意見を交換したりするだけでなく、学校を超えて、町村を超えての協働が今以上に促進されれば、より有意義なサミットになることが予想される。

## 2. 5. 3 福島県高校生社会貢献活動コンテスト

本コンテストは、地域の課題解決に向けた創造的復興教育を目的として、福島県教育委員会の主催で震災以降毎年行われている。各学校が探究活動を推進する一つのインセンティブとしての位置づけもあり、最優秀賞を受賞すると県知事への訪問という機会も与えられる。本校では令和元年度から本コンテストの積極的な活用を呼びかけており、今年度も希望のあった以下の3件を応募した。

このうち、書類選考に応募した3件が最終選考に選ばれた。最終選考会は10月3日(日)、自治会館(福島市)で行われ、県内の12件のプレゼンテーション、質疑応答が行われた。なお、例年よりもコンテストの実施時期が2か月早まり、進路活動が忙しくなる時期にコンテストの準備が重なることとなった。

審査の結果、以下のような結果となった。

### <優秀賞>3プロジェクト

- ふたば未来学園高校  
社会起業部  
活動名：今と未来を  
つなぐ語り部活動
- ふたば未来学園高校  
メディアコミュニケーション探究ゼミ  
ふたばメディアグループ  
活動名：ふたばメディア



### <入選>8プロジェクト

- ふたば未来学園高校  
原子力防災班ゼミ  
活動名：Future Quest  
～ふたばの魅力を探る～



となった。令和元年度より本コンテストに参加し、過去2年連続で最優秀賞を獲得してきた。このコンテスト以外にも様々なコンテストがあるため、今後は年間計画を見ながら、長期的な視点で低学年からのコンテスト出場を進めていく必要がある。



## 2. 5. 4 マイプロジェクトアワード校内選考会

「マイプロジェクトアワード」は、高校生の探究活動、マイプロジェクトなどを発表する日本最大級の学びの場である（認定NPO法人カタリバ主催）。本校では、応募するプロジェクトの質を高め、あわせてプロジェクトからの学びをより深める機会を設定するため、福島県 summit の校内予選という位置づけで校内選考会を実施した。校内選考会の前には、応募者を対象に「事前ブラッシュアップ会」を開催し、学年の垣根を越えて、それぞれのプロジェクト内容や発表に対してアドバイスをし合う機会を設けた。アドバイスを受けて、自分の発表に磨きをかけた上で、選考会当日を迎えた。本選考会には高校1年生～3年生まで19件の応募があった。1年生から3件の応募があり、早期に探究に取り組み自発的に探究活動を行う生徒も見られた。

審査はマイプロジェクトアワードの審査基準に則り、アクションしていることを前提に、オーナーシップ、コクリエーション、ラーニングの観点で行った。

**実施日：令和3年11月24・25日（水・木）**

内容：発表、質疑応答、審査

審査員：本校教員5名、カタリバ2名

校内代表を選考する審査についてはかなり紛糾し、「生徒たちのプロジェクトをどう評価するのか」「良いプロジェクトとはどのようなものか」など、審査員も改めて、探究やマイプロジェクトの意義を考えるきっかけになった。いずれも甲乙つけがたい発表であったが、最終的に福島県 summit に出場する校内代表の10件を決定した。

選考会という観点だけでなく、生徒同士の学びの機会も設けることで、学年を超えて対話をし、様々な視点に気づくことができたようだった。ここでの発表後、お互いの活動に協力し合う様子も見られ、交流の契機となったことが伺えた。



## 2. 5. 5 マイプロジェクトアワード福島県 summit

マイプロジェクトアワード福島県 summit は全国 summit に向けた福島県予選として、今年度で2回目の開催となる「学びの場」である。本校から校内選考会によって選出された9件が応募し、全員が書類選考を経てそのまま参加した。

実施日：令和4年1月9日（日）終日

実施形態：オンライン

発表数：60件

本校からの発表テーマ

○私はカフェをつくる！！（1年）

○居心地のいい学校を（2年）

○Let's unify the AED mark（2年）

○生理によりそう探究（2年）

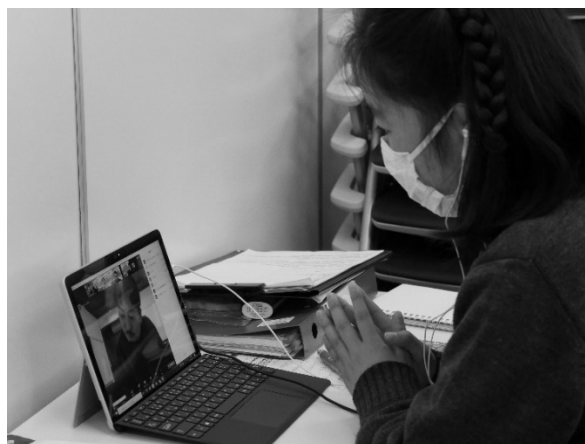
○誰一人取り残さない防災の世界（2年）

○浜通り×聖地巡礼（2年）

○双葉の新土産「石けん石けん」（2年）

○Let's cheer up ふたば！！（2年）

○人と人を繋ぐ場を（3年）



本年度の福島県 summit は「学びの場」として実施され、審査に関しては後日提出する発表動画をもとに、全国 Summit への選考を行う形であった。生徒達は分科会に分かれ、自分のプロジェクトの発表を行った。福島県ゆかりの専門家・実践者の方々や他校の生徒から、質問やコメントをもらいながら、自身のテーマや活動の内容について、分科会のメンバーと対話を行った。発表終了後の振り返りでは、どのような気づきや学びがあったかを言葉にするとともに、今後の活動をどうしていきたくかを考えた。普段は関わりのない大人や他校の生徒との交流を通して、自分の活動の意義に気づき、今後の活動のモチベーションアップにも繋がった。また、その結果、Let's cheer up ふたば！！が全国サミットに選出された。



## 2. 5. 6 全国高校生フォーラム 2021

本校では令和元年度まで SGH（スーパーグローバルハイスクール）に指定されており、その SGH ネットワーク参加校として本フォーラムに参加した。特に、生徒が探究において日常的に取り組んでいる地域の課題を全地球的な観点で捉えるきっかけとして本フォーラムに参加した。

実施日：令和3年12月19日（日）終日

実施形態：オンライン

発表者：久保田明日香、児玉花心

発表テーマ：To Use AEDs Effectively - the first step to people's proactive engagement in caring for each other's healthcare -

今回のフォーラムは、発表内容の事前の動画撮影と当日の交流会に分かれている。

まず、発表内容については、地域の課題として医師不足を取り上げ、医師や看護師といった医療の専門家でなくても人命を大切にするためにできることは何かを考え、身近にある AED に注目した。人々は AED については知っているものの、自分の身近な場所のどこに AED があるのか、それを常に意識して日々の生活を送っているのか、という点に着目し、日常生活の中で人々が AED の具体的な設置個所が分かるように、AED の標示を目につく箇所に設置するアクションを行った。その活動や調査を進めるにあたり、WHO の掲げる Social Determinants of Health（健康の社会的決定要因）という考えや、アメリカのシアトルでは住民の救急救命講習率が高い等、住民自ら自分たちの命を大事するという意識が高いという事実に出会い、AED を地域に広めていくためのヒントとしていく、という内容を発表した。

当日のフォーラムでは、大学教授や文科省の担当者の方、他県の高校生から様々な感想・意見をもらったが、特に「地元地域でのアクションはどのくらい行っているか」という質問によって、自分たちのアクションがまだ実際の地域レベルで行われていないこと気づき、今後本本格的に地域でのアクションを起こしていくことを確認した。

## 2. 5. 7 Glocal High School Meetings 2022

地域との協働による高等学校教育改革推進事業グローバル型指定校として、全国高等学校グローバル探究オンライン発表会に参加した。今年度も COVID-19 の感染再拡大に配慮し、Zoom を活用したオンライン発表会の形をとった。日本語発表と英語発表の2部門に分かれ、本校からはそれぞれに1プロジェクトずつがエントリーした。

### (1) 実施内容と成果

参加校は事前に発表の様子を Zoom で収録した動画の送付と、発表の要旨の提出を求められた。提出された全参加校のデータは、幹事校の名古屋石田学園 星城中学校・高等学校のご尽力により

<https://www.seijoh.ed.jp/glocalhsm/> に日本語英語とも分科会毎にアップロードされた。参加校の教員と生徒は分科会の動画を審査し、投票を行った。各分科会から、金・銀・銅賞が選出され、金賞の中でも優れたものには、文部科学省初等中等教育局長賞をはじめとする特別賞が付与される。

本校の結果は以下の通り。

**日本語発表部門 金賞・生徒間投票特別賞**

**タイトル「鉄たまごという可能性」**

**英語発表部門 金賞・探究成果発表委員会特別賞**

**タイトル「Memories and feelings connected by games」**



### (2) 今後の展望と課題

日本語発表部門は2年連続の金賞、今年度は日本語発表部門と英語発表部門のW金賞という成果を上げることができた。両部門金賞を受賞したのは本校と山形県立山形東高校の2校だけであった。ただ、大会委員長からのコメントにあるように、まだまだ「探究」として、改善の余地があるとのこと指摘もいただいた。生徒がたてた問いとその検証プロセスを明確にするための指導法の確立は本校の課題として残された。

## 2. 5. 8 第21回福島県総合学科研究発表会

### (1) はじめに

福島県総合学科研究発表会は、総合学科での学びの集大成の場である。本校を始めとして、県内で総合学科を設置している福島北高等学校や、会津学鳳高等学校など計8校が参加した。

今年度は、令和4年1月14日に福島県立小野高等学校で開催された。本校からは、口頭発表部門に1発表、展示発表部門に1発表がエントリーした。

### (2) 実施内容

#### 【本校からの発表テーマ】

#### ○口頭発表部門

「記憶と<sup>おも</sup>念いを繋ぐ町づくり」(3年生)

#### ○展示発表部門

大熊×いちご×私(3年生)

パワーポイントを用いる口頭発表部門では、3年間にわたり様々な探究アクションに取り組む中でNPO法人ハッピーロードネットの方々と一緒に活動に取り組み、特別な復興に取り組むのではなく、日常の何気ない活動にこそ「念い」が繋がる町づくりにつながることを本校の代表として発表を行った。

展示発表部門では、高校3年生1名が本校の代表生徒として発表を行った。スペシャリスト農業系列で活動する生徒がイチゴを用いたスイーツ開発や、大熊町民にかつて愛されていたUFOパンを復活させる取り組みなどを発表した。



### (3) 成果と課題

本校からエントリーした1件の探究活動は、優良賞を頂いた。残念ながら優秀賞・最優秀賞には届かなかったが、生徒にとって総合学科研究発表会は、これまでの活動を客観的に振り返ることができる良い機会となった。特に高校3年生にとっては2年間にわたる探究活動の集大成を発表できる貴重な場となった。中通り、浜通り、会津三地域の高校生が交流することのできる数少ない機会を、今後も活用して



いきたい。

## 2. 5. 9 東日本大震災メモリアル day 2021

本校では設立以来、宮城県立多賀城高等学校が2016年より主催している本発表会に参加している。今年度はオンラインでの参加とはなかったが、東日本大震災と原発事故との関係性の深い本校として、震災によって浮き彫りとなった地域の課題に注目した探究を中心に、発表会に参加した。

実施日：令和4年1月22日(日)

実施形態：オンライン

発表者：大和田紗希

発表テーマ：食のありがたみを認識してもらうために

発表内容としては、まず、本人の東日本大震災と原発事故による避難の経験から始めている。震災当時は幼稚園生で、記憶もおぼろげながらも、避難生活の大変さと日常生活のありがたさを忘れてしまった現代の人々への警鐘を込めて、探究内容が構成されている。震災当時の大変さを考えれば、日々の食事等の当たり前にある生活がどれだけ大切かを、もう一度多くの人に再認識してもらいというのが発表の大きな動機となっている。

その上で、日本の食品ロスについて、その食糧自給率や世界で飢餓に苦しむ人々の状況と照らし合わせながら、調査を行い、特に自分たちでも実践できそうな「家庭形食品ロス」への対策として、身近なところからできることを模索している。

## 2. 6 社会起業部の活動

### 2. 6. 1 社会起業部

社会起業部は、普段から地域を「知る・伝える・盛り上げる」活動をしており、今年度は「今と未来をつなぐ語り部活動」を主軸として活動を行った。パンフレットやポケットティッシュなどを製作し、交流先への配布を予定した。製作費、およびフィールドワークの費用は福島県の「チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業」の対象である。

#### (1) News Picks 交流会 (5月28日)

オンラインで山口・島根・宮崎の高校生と交流、「福島の処理水問題」について伝える活動を行った。「原発事故に興味はなくても、自分で積極的に情報を集めたりはしない」「とはいえ福島＝原発のイメージは強い」などの意見があった。

#### (2) 広野町の限界集落・簗平を訪問 (6月11日)



#### (3) いわき市湯本の原子力災害考証館でワークショップ (7月10日)

湯本温泉に原子力災害考証館を創設した古滝屋の当主・里見喜生さんからお話を伺い「語り部活動」を行うためには地域の歴史を学ぶ必要があることに気づかされるとともに、ふたば未来が、原発事故が起こった双葉郡にある唯一の高校だということを強く意味づけをしてくれた。

#### (4) 双葉町フィールドワーク (7月20日)

「ふたばプロジェクト」さんによる双葉町フィールドワークを通じて、双葉町を知り、語り部として必要な知識を学んだ。

#### (5) 白河高校とオンライン交流 (7月27日)

「浜通り×中通り 高校生震災対話会」をテーマに震災の意識について語り合うとともに、震災時小学5年生だった両校のOBからお話を伺った。その後、グループごとに話し合いをし、あるグループでは「若者に震災体験をどう伝えるか」という話題が出た。

#### (6) 福島県 社会貢献活動コンテスト (10月3日)

今までの活動を2年生がオンラインで発表し、優秀賞(2位相当)を受賞した(写真)。



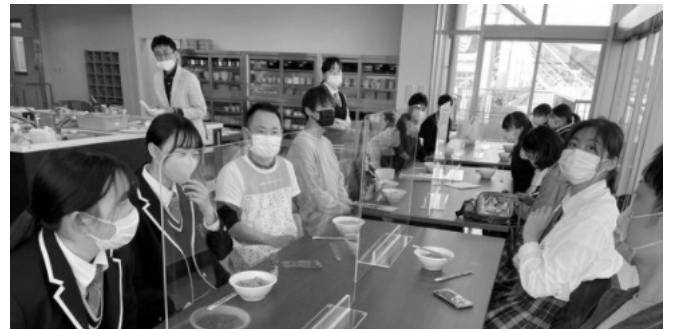
#### (7) 岐阜県瑞浪市の中京高校さんと交流 (10月27日)

#### (8) 東京都小金井市の中央大学附属高等学校の2年生と交流 (10月29日)

#### (9) 気仙沼・石巻研修 (11月20日～21日)

気仙沼のクッキングスタジオという所を借りて福島県産で豚汁を作り、NPOの方々と共食して福島の話をして、気仙沼の話聞いた。

NPO底上げを通じて、生徒より少し上の若い世代の方々3名に来てもらってお話を伺った。





観光客用さかな市場で、製作した双葉郡八町村のティッシュと部のパンフレット、福島県産のリンゴを配布したのち、南三陸町で語り部の方に乗っていただき津波被害のあとを見て回る。

小高い丘の上の小学校に行き「この一階まで津波が来ました」と言われてギョッとする。

翌日は8時半に宿を出て石巻へ。語り部さんに乗っていただき、児童の津波被害者を出した大川小学校跡へゆく。校舎の壁が引きちぎられ鉄骨がむき出しとなり、2階渡り廊下もねじ切られて倒れており、津波の凄まじい力を感じた。



(10) 早稲田大学の学部生・大学院生との交流 (11月22日)

### (11) 水俣研修 (12月26~28日)

福島原発事故の構造が水俣病事件の構造と似ていることに気づき、熊本県水俣市で水俣病について学習するとともに、福島県の現状を伝えていく2泊3日の水俣研修を企画した。

事前研修を経て(講義動画を右リンク先に掲載する)、初日は水俣病資料館を訪問した。症状の他に偏見・差別のことも深ぼりしていると同時に、各節の最後に「あなたがそのとき 患者家族、チッソ社員、水俣市民、周辺住民だったらどうしただろう」など、問いかけが設けてあるのも面白い。

翌日はホテルの朝食会場で朝食を食べているお客さんたちの前で、ポスターをあげれば未来学園高校創設の経緯と、社会起業部の取り組み、福島県の現状について話をしたのち、各テーブルに福島県産のリンゴと社会起業部配布セット(パンフ、双葉郡8町村ティッシュ、コーヒーなど)をお配りした。皆さん聞いてくださり、喜んで受け取ってくれた(右上写真)。

この日は一般財団法人水俣病センター相思社のKさんの案内のもと、水俣病事件の現場をフィールドワークした。

大崎岬から半島と島に囲まれた不知火海を見晴らし

た。「見えている範囲全てに患者がいます」とのこと。



おれんじ鉄道水俣駅からJNC正門まで歩いた。駅舎には水俣を紹介するコーナーがあり、オープン時は石牟礼道子さんの紹介もあったそうだがクレームがついて一カ月で撤去したという。現在、そこでは水俣病について一切言及されていない。水俣病を排除したい、なかったことにしたい、という市民の気持ちがうかがえる。「差別していたし、されてきたし」「それをのりこえて、売りにしていこう、という気持ちまではとても到達していない」とKさん。

水俣病「爆心地」の百間排水溝から埋立地を左手に見つつバスは走る。16年間かけて埋め立てられたようだ。先端はエコパーク水俣となっており、石仏が並ぶ敷地を歩いた。碑があるが「過ちは繰り返さない」という碑文にはヒロシマと同様主語がない。英訳の主語はWeとなっている。「行政としては、水俣病はみんなが悪かった、時代が悪かった、というストーリーを作りたいんです」とKさん。

続いて漁村地域を見学する。一口に水俣市といっても工場がある北部と漁村がある南部は全く異なる印象だった。10キロの間に前近代と近代の暮らしがある。山にへばりつく漁港と平野、一次産業と二次産業、海に生きる人々と経済成長を担う人々、そして「被害者」と「加害者」の世界だ。

お昼のあと相思社へ行き、水俣病歴史考証館を見学し、患者さんのお話をうかがった(下写真)。



## 2. 6. 2 社会起業部カフェチーム

### (1) はじめに

「地域を知る・伝える・盛り上げる」ことを目的として、社会起業部カフェチームとして高校の部活動でカフェを運営している。ケーキや焼き菓子の製造、子供たち向けのイベント開催など、生徒主体で活動している。

### (2) 実施内容

今年度の社会起業部カフェチームは、コロナウイルス感染症の感染予防対策をしっかりと行い、より地域に密着したカフェを目指すため一か月毎に双葉八町村などをテーマとしてイベントやインタビューを実施した。また今後の活動内容について情報共有を図った。

### (3) 成果

#### ① 「双葉のだるまを知ろう!!」(本校) 5/20

双葉だるまは、従来のだるまをそのまま使うのではなく、町章の「竹」を模様付けしてした「町章だるま」。「鶴は千年、亀は万年」という縁起がよいことわざをモチーフとして、眉は鶴、ひげは亀のデザイン。震災後の双葉町を応援する気持ちで「七転び八起き」という意味があることを学んだ。

双葉だるまの特徴を知るだけでなく、そこに込められた想いを直接講師の方から聞くことができよい経験となった。



#### ② 藍染め体験(楡葉町) 7/17

広島の小中学生たちが応援の思いをこめて、楡葉へ藍の種を送った。そこから「ならば藍染会」の方々の活動が始まった。その復興の思いが込められている藍を使って、シルクのスカーフを10枚染めさせていただいた。作成後のインタビューでは、「若者が藍染めという伝統文化にどう関わるかは自分たちで考えること」という熱い言葉をいただいた。今後のcaféふうとして自分たちにできることを考え、今後の活動に生かせるよう思わせる体験となった。



#### ③ 第6回全国高校生SBP交流フェア

カフェの紹介をします! オリジナルブレンドコーヒーのふうスペシャルを召し上がれ

カフェチーム小野澤、山田が全国高校生SBPフェアに参加し、「極」を受賞した、惜し



くも決勝進出は果たせなかったが審査員より大会評価を受けた。

特別賞 極株式会社百五銀行賞  
皇學館大學学生スタッフ賞

#### ④ 嵐が丘(葛尾村) 10/23

奥様はおいしいものを食べることが大好き。すべて手作りにこだわった料理やケーキをみんなに食べてほしい思いでカフェをオープンした。若いころから自分が気に入ったものを少しずつ集めたコーヒーカップやソーサーでお客様をもてなしていた。3.11の地震により大切に集めたコーヒーカップやソーサーの大部分が割れ、「地震があるなら福島にはこなかったのに」との言葉が印象的だった。現在は、福島や関東からもお客様が利用する予約でいっぱいのカフェだ。



#### ⑤ ハロウィンイベント 10/30

今年のハロウィンイベントは福祉系列の生徒とコラボをした。

caféふう主催! みんなで楽しむハロウィンイベント

## かぼ"ちゃまつり"

**10/30(土)** **10:30~13:30** **参加費 無料**

イベント①「折り紙でハロウィン飾りを作ろう!」  
ふたば未来学園高校の生徒が折り方を教えます! 色々な形を折って、お家やカフェをデコレーションしてみませんか?  
お子様だけでなく、大人の皆さんもぜひ一緒に折ってハロウィン気分を味わいましょう~

イベント②「みんなでポッチャを体験しよう!」  
ポッチャとはパラリンピックの正式種目でボールを転がして目標のボールに一気に近づけられるかを競うスポーツ! 当日はふたば未来の生徒がルール、やり方を丁寧に教えます。初心者大歓迎! 幅広い年代の方にお楽しみいただけます。

#### ⑥ 出張販売

広野町役場に出張販売を試みた。役場いっばいにコーヒーの香りが立ち始め、多くの方に利用していただき、準備したポットではお湯が足りず、役場のポットで助けていただいた。役場の方からは次回開催の催促と、「予約」というキーワードをいただいた。ご利用ありがとうございます。



#### (4) 課題

今後の課題としては地域イベントへの参加を積極的に行いたい。コロナウイルスによる制限も徐々に解除の見通しが立った今、たのしい思い出を作りながらcaféふうでゆったりとした時間を過ごしていただけるような新たな企画を立案している。

生徒の学びが継続できるように、様々な工夫をしながら他校との交流会も含め積極的に活動していきたい。



### 3. 1 探究活動の指導法 I 演劇での地域課題把握から探究接続

本校では開校初年度より、1年次に「演劇を通して地域の課題を知る学習」を実施してきた。これまで、生徒の特性に応じた演劇プログラムのブラッシュアップに並行して、演劇から探究への接続について試行錯誤してきた。演劇で得た学びを探究に上手く繋ぐことが課題であった。演劇という対話的実践の場において、ダイナミックに獲得した学びが、その後の探究活動にどう活かされているのか。演劇を総合学習の時間に取り入れたことによる生徒と教員の関わり方の変容をまとめる。

#### (1) なぜ演劇なのか

演劇プログラムで、生徒は集団創作という協働的な関わりの中で学んでいく。学びは、「対話」を通して他者との間で生まれ、意見も考え方も違う他者と向き合う中で、自らの学びが育まれる。また、演劇の場で関わる他者には、一緒に創作を行う実在の「他者」に加え、演劇作品の中に登場する、まだ出会ったことのない想像上の「他者」も含まれる。時間や空間を超えた多様な「他者」との関わりの中で学んでいくプログラムである。

本校の授業内容については、第2章 研究開発の内容・活動実績の「地域創造と人間生活」にて詳しく述べているため割愛する。地域を歩き、人と出会い、そこで見えてきた課題を演劇で表現することで地域課題を立体的に捉えるという目的は当初から変わらないが、開校後より7年の年月を経て、双葉郡を取り巻く環境や生徒の震災との距離感も変化中、プログラム内容も変容を続けてきた。ワークシートを用いて脚本を書き上げていくスタイルから、コミュニケーションを重視したインプロ(即興演劇)へと変えた。演劇を創ることが目的ではなく、そのプロセスの中で、「対話」や「コミュニケーション」を通してしか乗り越えられない壁を乗り越えさせる意図を持ってデザインした。対話の種類は大きく分けると以下の3つである。



#### ・地域の大人との対話(地域×生徒、地域×地域)

生徒達は、入学後に双葉郡8町村バスツアーに参加し、双葉郡と出会う。後に地域の方々の取材に入る。震災から10年以上が経ち、震災との距離感も多様な生徒達が、地域の方々との対話を通して、震災当時から現在に至るまでの話や現在課題と感じていることなどを取材していく。初めのうちは、生徒たちにとってそれらは演劇を創作するための素材でしかなく、実感を持って取材対象の話や腹落ちさせることは難しい。取材対象をきちんと理解するには、その人だけでなく、その人を取り巻く社会についても理解する必要がある、そのためには足りない情報を補わなければならない。

他者を演じるということは、その人物を代弁してしまう可能性を有する。また、生徒達が作った作品を取材対

象本人が見るということは、その人が語る様々な事柄の中から生徒が何を切り取るか、言い換えると、その人が生徒たちの目からどう映ったのかが表出することとなる。



象本人が見るということは、その人が語る様々な事柄の中から生徒が何を切り取るか、言い換えると、その人が生徒たちの目からどう映ったのかが表出することとなる。取材対象やその周りの方々を自分の身体を使ってなぞることを続けているうちに、そしてそれが誰かの前に現されてしまうという「責任」を感じる中で、生徒たちは「他人事」ではいられなくなる。自分の演じる他者は、目の前にいて、固有の人生を歩んでおり、すぐに触れられる生身の身体を持っていて、実際に自分が現実世界で関わりを持ち、その人生を変化させる可能性を有するのだ。そこで迫ってくる責任感は重いものがあるが、それが演劇を媒体とした対話のなせる技であり、他者を演じるという非日常的な演劇体験を「遊び」にさせないための仕掛けである。そして、それらの作品を鑑賞し、実際に舞台に立った生徒たちや、客席の生徒たち、審査員、取材対象である地域の方々と対話することで、重層的な「主体的・対話的で深い学び」が実現しているのだ。



取材対象の視点で客観的にこのプログラムを分析する必要もあるだろう。取材・FWから最後の演劇の発表会までの数ヶ月間、生徒たちとの対話から地域の方々にどのような変化があったのかは、これまでアンケートのような客観的なデータを取ったことはない。しかし、発表会の後の対話の時間において、このプログラムが、取材対象に良い影響を及ぼしていると感じた。地域の方は、自分のことを知ろうとしてくれている生徒の想いに触れ、そのことを大変肯定的に受け止めてくれていた。また、震災直後ではあり得なかった、立場を超えた対話も見られた。極端に言えば加害者と被害者のような関係性だっ



た人々の間に、生徒たちの演劇を通してお互いの当時の想いを知り、お互いの境界を超えて新たな対話が生まれる場面もあった。

「境界を越える」とは、自らが引いた境界が揺らぐことである。境界とは自分のモノの見方に関わるものであり、人が自らを納得させるために整理し、すなわちカテゴリー化するという大きな力によってつくられる。震災当時、そうすることで自分の心を守ってきたであろう（当時はそうすることが正解であったと思う）方達が、震災後10年以上経ち、生徒との対話や、演劇を通してそれらの境界が揺らぎ、自分と他者を全く異なるものとして区切る視点自体が疑わしいものとして現れる。演劇を見ることで他者の記憶を追体験し、自分が自分でありながら他者に「なる」ことで足場を揺るがされる時、境界が揺らぎ、自分の見方で他者を判断する眼差しは相対化され、その先に対話が生まれるのだ。

・演劇を創るチーム内での対話（生徒×生徒）

演劇的手法を用いた活動で生徒は、グループ活動という普段とは違う他者との関わりの中で、話し合いながらFW先を決め、取材の役割分担をし、取材した内容を演劇にしていく。

往々にしてグループ内で意見の違いは生じる。演劇を創るために構成された男女混合のグループ編成はクラス担任に委ねられており、それぞれの教員が様々な意図を持って生徒を配置している。そのようなグループの中で対立や分断が生じた時、それは平穏なものばかりとは限らず、時には葛藤、衝突、軋轢が伴う。一見、上手く行っているように見えるグループも、よく観察すると、一部のリーダータイプの生徒が主導で話し合いを進めており、その他が傍観者だったりする。

傍観者というのは、対話や活動に参加しようとしないう、聞いているふりをしていてだけ無関心な人、自己開示しない人、嘘をついたり、正直に言わない人などのことだそう。嘘をつくということは、「自分という個人として他者と関わらない」ということであり、会話をしているように見えても実は会話をしていないということだ。（「他者の靴を履く」ブレディみかこ著）

意見の違いをネガティブなものとして捉え、傍観者であることで乗り越えるべき壁を避けており、対話が成立していない班は、作品が深まらずに表面的な部分をなぞったものとなることが多い。逆に、あらゆる壁にぶつかり、上手く行っていない班ほど、それらの対立や分断を対話によって乗り越えた先に完成した演劇は、こちらが驚くほど地域の課題を捉えた素晴らしいものとなっている。



【生徒たちの対話の例】

他県出身のトップアスリートの男女と、浜通り出身の生徒、中通り出身の生徒らで構成された班での話である。この班は、浜通り出身の女子生徒Aの希望により、大熊町で家族を津波で失いながらも伝承活動を続ける木村紀

夫氏を取材した。しかし、FWにて大熊町の帰還困難区域にある木村氏の自宅を訪問することとなった際、Aが見えない放射能への不安から、参加を辞退したいと申し出た。Aに振り回されていると感じた生徒たちの創作意欲が下がり、グループ内で対立が生まれ、雰囲気も悪くなってしまった。WS講師や教員と相談の上、話し合いの場を設けた。出身地も、本校に進学した理由も、震災や原発事故に対する認識もバラバラな生徒たちが、お互いの考えを共有したことにより、価値観の違いを認識できた。自分とは違うもの、自分は受け入れられない性質のものでも、他者として存在を認め、その人のことを想像することができた。大変理性的な対話であり、その場にいた教員は静かに感動を覚えた。その対話がまさにエンパシーそのものだったからだ。その後、その班は素晴らしい作品を創作した。生徒たちは、まさに双葉郡で起きている「分断や対立」を自分たちの班の中で体験し、対話を通して乗り越えたことで以下のような感情が生まれたという。Aの感想である。

「対立が生まれた時、心が苦しくなったけど、そこで逃げずに向き合って対話をするのが偏見や差別をなくすことに繋がると学びました。（中略）みんなの考えが違うほど時間もかかり、まとめるのも難しかった分、多様な意見や考えがうまれました。演劇は年齢や性別、人種を超えて人と人を結び、相手や自分のことを知ることでできるものだと思います。同時に、双葉郡の問題も対話によって解決されていくべきものだと思います。」

これらのことから、学びは、「対話」を通して他者との間で生まれるものであると分かる。時にそのやりとりはダイナミックで騒然としたものになりうるが、他者を眼差す自らの視点に気づき、境界が揺らぎ、変化する自分自身を知ることは、これまで見えていなかった他者の側面を見て、関わり方を柔軟に変えられるという生き方を作り直すことにもなる。

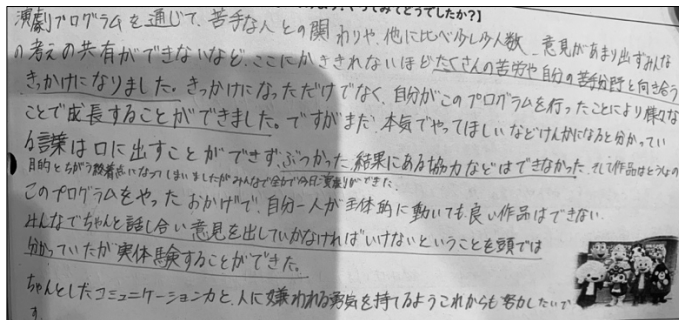
・演劇プログラムを通じた自分自身との対話（メタ認知）

演劇的手法とは、「表現」することが目的ではなく、自身の身体を通して他者・仲間・ひいては地域と主体的に関わることで生徒自身が経験し、考え、変容することである。

演劇プログラムでは、生徒一人一人に冊子が配られる。授業の終わりに必ず振り返りを記入させ、その中で生徒たちは自らの行動を客観的に「省察」していく。意識的に自らを振り返る時間を取ることで、自分の言動や行動を俯瞰して見つめ直し、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動に繋げることができるようになる。この能力は、本校が育てたいルーブリックの項目の1つである、「自らを振り返り変えていく力（メタ認知）」である。

1.あなたはどれくらい積極的に貢献できましたか？(数字に○)
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分
どうでしょう？
2.あなたはどれくらい積極的に発言できましたか？
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分
3.発言するとき、相手にわかりやすく伝えることができましたか？
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分
4.あなたは他の人の意見を耳を傾けられましたか？
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分
5.あなたは班の議論の前に進めることに貢献できましたか？
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分
6.タイムキープを意識し、議論をまとめることに貢献できましたか？
十分・ 5 4 3 2 1 ▶ 不十分

創作期間中は、渦中ということもあり冷静に振り返ることができない生徒もいるが、全ての演劇プログラムが終了した後の全体振り返りは実感を伴った深い対話があちこちで生まれる。ポジティブなことだけでなく、「最初は嫌だった」「やりたくなかった」というネガティブなことも聞くことができる。それは、演劇を通して生徒たちが自己開示できたことと、それらを共有できる関係性を作ることができたことの現れである。これらのプログラムによって生徒たちが何を体験し、考え、変容したのかを言語化させることで活動の意味や意義をとらえる。評価が対象とするのは、学びの結果ではなく、学びのプロセスになる。



## (2) 教員の関わり方の変容

生徒の成長には、それを見守る教員の関わり方が重要である。本校では7年かけて、演劇の授業が市民権を得ることができた。生徒の成長が大きな証拠となっているからである。しかし、これから演劇を取り入れようとしている学校は、教員の理解を得る際に難しさを感じることもあるだろう。

授業に演劇的手法を取り入れるということは、実践者が意図する、しないに関わらず、現行の教育に異議を投げかけるものとなる。さらに、それらが身体や感覚、スピリチュアリティの領域に踏み込んだ活動であることがさらに相互の理解を難しくさせる。実践者のねらいは抽象的であり、生徒の状態に応じてどんどん変えていかねばならないし、これらの活動が育てる生徒たちの力はすぐには目に見えにくいものであるし、数値でも測りにくいものであるからだ。

しかし、対話、身体、関係、創造、想像。これらはすべて演劇が大切にしている要素でもある。時に「対話」を通して他者との間で学びが生じる時というのは、そのやりとりそのものが衝突や軋轢を伴うものとなることである。そのため、これらを制限することなく伸び伸びと生かしていく演劇プログラムは、現在の教育の在り方や教員の関わり方を部分的にあるいは全体的に批判するものになってしまう。そこで重要なのは、演劇プログラムに関わる教員のマインドセットである。教員は、これまでの授業における「インストラクター」としての生徒との関わり方、「ファシリテーター」としての関わり方に変容する必要がある。ファシリテーションの語源はラテン語の「facilis」で、「する・つくる」(facio)ことが「できる・ありうる」(ilis)ようにするという意味である。「する・つくる」のは学習者であり、それが「できる・ありうる」ようにするのが我々の仕事となる。

他者をコントロールしない。これがインプロ（即興演劇）におけるファシリテーションの考え方である。コントロールしようとすれば、コントロールできなかつたらどうすればいいかという恐怖がうまれる。また自分の思い通りにいかなかった時に、無理矢理に未来や他者をコントロールしようとしてしまう。まずは今、生徒のまわりで起こっていることをよく観察する。生徒をどうやって支援できるかを考える。その際に前提となる考え方は「人は人を変えることはできない」という考え方だろう。演劇的手法においては、我々が生徒を変えることはできない。もし生徒が変わることがあるならば、それは生徒が自分で変わったということである。我々がができるのは学習者が自ら変わるときの支援である。

生徒が民主的な社会の形成者として、問題解決能力と市民的資質育成の学びが生成されるためには、「教師から生徒への一方的な知識伝達」を受動的に受けさせられている状況を克服しなければならない視点が見えてくるのだ。未来とは受け取るべく与えられるものではなく、人間によって創造されるべきものである。そのためには人々は「傍観者」ではなく「行為者」にならなければならない。それにより生徒が自分と世界との関係を変えていく時、我々教員はどのように関わっていけば良いのか。

### 対話を育むWSの態度と行為について

- 1 生徒と教師は学び合う
- 2 教師も知らず、生徒も知らないという自覚から始める  
(無知の知の自覚)
- 3 教師と生徒が対話により創造する (対話の学びの生成)
- 4 教師と生徒は耳を傾けあう (協働と他者尊重の関係)
- 5 教師と生徒で公共性を作り出す  
(意識化から主権者となるプロセスへ)
- 6 生徒が学習内容を選択し教師はファシリテートする  
(生徒の主體的な探究姿勢と教師の支援)
- 7 生徒が行動し教師はそのことから学ぶ  
(異化による気づき、傍観者から行為者への学び)
- 8 生徒が問題意識からテーマを決めて探究する  
(問題の関心と解決への意欲)
- 9 教師は父権主義から解放されて生徒と関わる  
(権威性からの解放)
- 10 教師と生徒の関係を注入の主体客身体関係から対話する協働の探究者の関係に変容する  
(「演劇教育とワークショップ 学校という劇場から」(論創社) 第3章『演劇は学びを民主化できるのか』より)

インストラクター、ファシリテーター、メンター、そして学習者など、複数のアイデンティティをゆるやかに持つこと。教師自身も、自分はいかにできない、これしかしてはいけなくて決めつけるのではなく、生徒のありのままを観察し、その混沌を冷静に見つめる。そこで自身に起きる葛藤も楽しんでほしい。時には生徒と一緒に悩むフリをし、生徒が前に進むための後押しをする。こういう悪く言えばいい加減さ、よく言えばしなやかさを持った教員が今後さまざまな人との関係の中で創造的に実践を作り出していけると考える。その中で、教師自身も学び、教員としての関わり方を探究していくのだ。そしてこのマインドは探究を進めるにあたって必ず必要



